

2019年度 修士学位審査請求論文

千葉県市原市における伝統方言の若年層への継承について
—アンケート調査による継承の実態と継承に関わる要因の分析—

森田 帆南

7212180006-4

立命館大学大学院言語教育情報研究科

2019 年度

要旨(Abstract):

本研究では、千葉県市原市における伝統方言が若年層にどのくらい認知されているのか、そして方言が継承される要因は何かについて考察するため、中学生を対象にアンケートを実施した。

その結果、アンケート全項目の回答の平均は、「自分でも使う」が7.9%、「聞いたことがある」が21.0%、「聞いたことがない」が71.1%であり、方言を知らない割合が多数を占めた。しかし、文の要素や語彙の種類ごとに継承率に差が見られた。例えば、標準語と大きく異なる形式の語彙の多くは、使用率と知識保有率を合わせても10%に満たないのに対し、小学校で使われる「業間休み(=2時間目と3時間目の間の休み時間)」は使用率が50%以上であった。

また、言語環境と方言の継承には相関関係が見られ、伝統方言の形式を「自分でも使う」と回答した調査協力者の中で「祖父母と同居している」ないし「家族に方言話者がいる」と答えた割合は、ほとんどの項目で半数以上であり、100%の項目も見られた。さらに、「祖父母と同居している」ないし「家族に方言話者がいる」と回答した調査協力者が多い地域は、方言の使用率と知識保有率も高い傾向があることがわかった。以上のことから、伝統方言の継承において家族に方言話者がいることは、若年層に方言が引き継がれる大きな要因の1つであると考えられる。

キーワード(Keywords):

伝統方言、市原市方言、継承、若年層、使用率、知識保有率

目次

1. はじめに	1
2. 先行研究	4
2.1. 市原市の伝統方言に関する先行研究	4
2.2. 方言の継承に関する先行研究	4
3. 市原市の伝統方言	5
3.1. 音韻特徴	5
3.1.1. 子音の特徴	6
3.1.2. 母音の特徴	8
3.1.3. k音脱落現象とk-h現象	10
3.1.3.1. k音脱落現象	10
3.1.3.2. k-h現象	11
3.2. アクセント	12
3.2.1. 1モーラの名詞	13
3.2.2. 2モーラの名詞	14
3.2.3. 3モーラの名詞	15
3.2.4. 4モーラの名詞	17
3.2.5. アクセントのまとめ	20
3.3. 形態的特徴	21
3.3.1. 動詞の活用	21
3.3.2. 形容詞の活用	27
3.3.3. その他の形態的特徴	29
3.3.3.1. 疑問を表す助詞「カ」の方言形「ガン」	29
3.3.3.2. 経験者格助詞「ガン」、「ガニ」	30
3.3.3.3. 所有を表す「ガ」	30
3.3.3.4. 場所を表す格助詞「ナ」を伴った連体修飾句	31
3.3.3.5. 命令・勧誘の「ガイ」	31

3.3.3.6. 主題を表す「オッパ」	31
3.3.3.7. 継起の「ト」に相当する「クレー」	32
3.3.3.8. 接続助詞「ケンガ」	32
3.3.3.9. 「…という」という意を表す「チ、ツチ」	32
3.4. 特徴的語彙	32
3.4.1. 動詞語彙	33
3.4.2. 形容詞語彙	33
3.4.3. 名詞語彙	34
3.4.4. その他の語彙	34
4. 調査概要	34
4.1. 調査対象	34
4.2. 調査内容	36
5. 調査結果	41
5.1. 調査協力者の方言認知、言語環境について	41
5.2. 伝統方言の継承率	42
5.2.1. 形態法に関する項目	45
5.2.2. 音韻に関する項目	47
5.2.3. 語彙に関する項目	50
5.3. 「自分の言い方」について	53
5.3.1. セクション1における「自分の言い方」	54
5.3.2. セクション2における「自分の言い方」	55
5.3.3. セクション3における「自分の言い方」	55
5.4. 伝統方言の使用と家庭の言語環境の関係性	56
5.5. 学校ごとの方言認知、言語環境について	59
5.6. 地域ごとの方言認知、言語環境について	61
5.7. まとめ	65

6. 終わりに	66
謝辞	66
参考文献	67
付録1：アンケート調査企画書（教育委員会宛て）	I
付録2：先生方用アンケートマニュアル（全2ページ）	II
付録3：千葉県市原市の方言に関するアンケート（全4ページ）	IV

1. はじめに

本研究は、千葉県市原市における伝統方言の若年層への継承について調査、分析することを目的としている。

市原市(2019)によると、千葉県市原市は、千葉県中央部に位置する人口約 27.7 万人の市である。図1は関東地方における、千葉県市原市の位置を表している。また、図2は千葉県における市原市の位置と、隣接する市町村である。市原市の面積は 368.17 平方キロメートルであり、千葉県の市町村では最も大きい。現在では、製造品出荷額等が全国2位の工業都市として知られている。

本稿における伝統方言の定義は、平塚(2019)による定義を用いる。平塚(2019)は、「伝統方言とは、地域ごとに受け継がれてきた方言のことで、メディアや交通網の発達による共通語化を受ける前の姿のことを指している。」と述べている。

平山(1997)の区画では、市原市の伝統方言は安房・上総方言に属している。図3の地図は方言区画を表している。主な特徴は、意志や推量、勧誘を表す際に文末詞「べ/ぺ」が用いられることや、ノダ文における「ノ」が脱落する現象である(詳しくは、「3.市原市の伝統方言」に言及している)。また、市原市方言は、市内の中でも若干異なる特徴を持っている。東京湾に面した沿岸部は、昭和 30 年代まで漁業が盛んに行われていた地域であり、主に漁師が使う言葉として「浜言葉」や「ドヘッコトバ」と呼ばれる伝統方言がある。一方内陸部は、現在に至るまで稲作を中心とする農業が盛んな地域であり、農業関係者を中心に伝統方言が話されている。市原市は、1967 年まで自然村合併や行政村合併を繰り返し、現在のかたちになった。ゆえに、市原市内の方言にも若干の変種があると考えられる。

千葉県市原市の伝統方言(以下、市原市方言)の話者は、現在、70 代以上の高年層、特に農業関係者に偏っていると考えられる。これは筆者自身の内省によるものであるが、高年層より下の世代は、年齢が低くなるにつれて方言の使用が減少する印象がある。また、市原市方言に関する先行研究は、記述的研究がほとんどであり、その多くが 2000 年より前に書かれたものである。市原市方言の使用や継承に関する先行研究は、管見の及ぶ限りまだない。そこで、2019 年現在において、市原市に住む若年層(本研究では中学生を対象とした)が、市原市方言に関して、どのくらい、そしてどのような項目を認識しているのかを調査する必要があると考えた。継承率を言語環境や地域などの観点から多角的に分析し、方言が失われる要因を考察することは、市原市方言だけでなく消滅の危機に瀕する言語の研究に貢献することができると考えている。

本論文の構成は以下のとおりである。第 2 章で市原市方言に関する先行研究を紹介し、第 3 章

で先行研究を参照しながら市原市方言の概要を示す。第4章では、アンケート調査の概要として、調査対象である中学校の説明と調査項目を示す。第5章は、アンケート調査の結果と、その結果の分析である。この章では、主にどのような文の要素が失われやすく、残りやすいのか考察するとともに、市原市における産業構造の変化の観点から、伝統方言の継承ないし衰退の要因について考察した。



図1. 関東地方における千葉県市原市の位置



図 2. 千葉県における市原市の位置と隣接する市町村



図 3. 千葉県方言区画図 (佐々木 2018)

2. 先行研究

2.1. 市原市の伝統方言に関する先行研究

市原市方言に関する先行研究は主に記述的研究である。

平山(1974)は、市原市の南部から北部にかけて横断する養老川の流域の地域で方言収集を行った。上流(内陸部)は小谷田方言を、下流(沿岸部に近い)は新堀方言、川岸方言、野毛・谷方言を収集し、上流地域と下流地域の方言差を指摘した。

また、藤原(1979)は、市原市発行の『市原市史別巻』において市原市方言の体系的な記述を行った。特に語彙の記述については、品詞別ないし名詞の部門別(e.g. 天候に関するもの、土地に関するもの、人に関するもの、など)に約 1500 語を収録している。

市原市方言の言語特徴に焦点を当てた研究では、音韻とアクセントに関するものが最も多い。谷萩(1971)、岡野(1981)は市原市の沿岸部である五井地区周辺において、語中・語尾のカ行音がハ行音で発音される現象(以下、k-h 現象)を調査した。また、内陸部における語中・語尾のカ行音がア行音に化す現象(以下、k 音脱落現象)は平山(1974)、藤原(1979)によって調査、分析されている。

アクセントに関しては、金田一(1942)の関東地方におけるアクセント調査の中で、「房総アクセント」として言及されている。また、藤原(1972)および藤原(1979)は、当市出身である自身の内省を用いてアクセントを記述した。

市原市方言に関する語彙集も出版されている。佐倉(2007)による市原市の沿岸部、五所・八幡地域の方言語彙集や、落合・谷島(2007)による沿岸部の漁師言葉やその地域の歴史や民俗に関する文献などがある。

その他、千葉県民話集の中にも、市原市の伝統方言で語られているものがある。本稿では、安藤(1980)『ふるさと千葉県の民話』の中から例文をいくつか引用する。

以上の先行研究から得られた市原市方言の特徴を、第 3 章で記述する。

2.2. 方言の継承に関する先行研究

市原市方言の継承に関する先行研究はまだない。しかし、方言は異なるが若年層への方言継承の調査をした研究に、佐々木(2011)がある。佐々木(2011)は、茨城県常総市における伝統方言の若年層への継承を調査するため、常総市内の中学生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、伝統方言を使う若年層の割合はいずれの文の要素(動詞形態法、格助詞、音韻、語彙など)においても 10%前後と継承が困難な状況にあることがわかった。また、形態法、格助詞、音韻、語

彙に関する項目において、語彙が最も知識保有率が低く、語彙以外の項目は約半数の調査協力が知識を持っていた。その結果から、文の要素別に継承率をみると、項目ごとに継承率に違いがあることを指摘している。

3. 市原市の伝統方言

この章では、先行研究を参照しながら市原市方言の概要を示す。第1節は音韻特徴である。子音の特徴と母音の特徴を示したあと、先行研究が最も多いk音脱落現象とk-h現象について言及する。第2節はアクセントの特徴である。本研究において、アクセントの調査は一切行わなかったため、金田一(1942)および藤原(1972)と藤原(1979)を参照しながら示す。第3節は形態的特徴である。なお、本稿では述語に含まれる接尾辞だけでなく述語をホストとする助詞も述語形態法に含めることにする。同様に名詞形態法には名詞をホストとする助詞も含めることにする。方言における動詞および形容詞の活用の仕方について示したあと、それ以外の主な特徴について例文を示しながら言及する。最後に、第4節は特徴的語彙である。先行研究で記述された全ての語彙を示すことはできなかったが、その中でも市原市方言において特徴的であるものを種類ごとに示している。

また、先行研究で記録されているものの、筆者の内省が曖昧な点は、2人の生え抜き話者に協力していただき、聞き取り調査によって確認を行った。協力していただいた話者の情報は表1のとおりである。

表1. 聞き取り調査の協力者の情報

	1人目	2人目
本論文での呼称	80代話者	50代話者
性別	女性	男性
生年(年齢)	1936年(84歳)	1967年(53歳)
出身地	千葉県市原市二日市場	千葉県市原市海保

3.1. 音韻特徴

市原市方言では、子音と母音のどちらにおいても特徴的な音韻現象が見られる。特に、子音の特徴において、語中・語尾のk音が脱落もしくはh音で発音される現象は、市原市方言特有の現象として先行研究でも記録されている。以下に、市原市方言の音韻特徴を挙げる。なお、子音の特徴と母音融合については藤原(1979)を参照しつつ、自分の内省に従い記述する。k音脱落現

象については平山(1974)、藤原(1975)、k-h 現象については谷萩(1971)、岡野(1981)を参照した。

3.1.1. 子音の特徴

市原市方言における主な子音の特徴は以下の7つである。まず、7つの例を挙げた上で解説する。

(1) /k/が/g/に対応する語の例（「*」は/k/が/g/にはならない語）

標準語形	方言形
イ <u>ク</u> (行く)	イ <u>グ</u>
イ <u>カ</u> ナイ(行かない)	イ <u>ガ</u> ネー
<u>カ</u> エル(蛙)	<u>ゲ</u> ール
<u>カ</u> バン(鞆)	? <u>ガ</u> バン
<u>カ</u> ニ(蟹)	? <u>ガ</u> ニ
サ <u>ケ</u> (酒)	*サ <u>ゲ</u>
ト <u>ケ</u> イ(時計)	*ト <u>ゲ</u> イ

(2) /d/が/z/に対応する語の例（「*」は/d/が/z/にはならない語）

標準語形	方言形
ナ <u>デ</u> ル(撫でる)	ナ <u>ゼ</u> ル
クマ <u>デ</u> (熊手)	クマ <u>ゼ</u>
ノ <u>ド</u> (喉)	ノ <u>ゾ</u>
カ <u>ダ</u> ンバ(花壇場)	カ <u>ザ</u> ンバ
ド <u>ウ</u> ロ(道路)	* <u>ゾ</u> ウロ
ダ <u>ル</u> マ(達磨)	* <u>ザ</u> ルマ

(3) 語中の/mu/が/bu/に対応する語の例

標準語形	方言形
サ <u>ム</u> イ(寒い)	サ <u>ブ</u> イ、サ <u>ビ</u> ー
サ <u>ム</u> サ(寒さ)	サ <u>ブ</u> サ
ケ <u>ム</u> イ(煙い)	ケ <u>ブ</u> イ、ケ <u>ビ</u> ー

ケ <u>ム</u> リ(煙)	ケ <u>ブ</u> リ
ネ <u>ム</u> ッタ(眠った)	ネ <u>ブ</u> ッタ

(4) 疑問詞の先頭の/n/の脱落

標準語形	方言形
<u>ナ</u> ニ(何)	<u>ア</u> ニ
<u>ナ</u> ンデ(何で)	<u>ア</u> ンデ
<u>ナ</u> ゼ(なぜ)	<u>ア</u> デ
<u>ナ</u> ントモナイ(何ともない)	<u>ア</u> ントンネー
<u>ナ</u> ンダカ(何だか)	<u>ア</u> ンダガン

(5) 語中のラ行音が促音になる語の例

標準語形	方言形
ヌカ <u>リ</u> ダ(ぬかり田)	ヌカ <u>ッ</u> ダ
ト <u>リ</u> カエル(取り替える)	ト <u>ッ</u> ケール
ク <u>ル</u> ダロウカ(来るだろうか)	ク <u>ッ</u> ダオカ
ダカ <u>ラ</u> ダ	ダカ <u>ッ</u> ダ
コ <u>レ</u> ダケ	コ <u>ッ</u> ダケ
ソ <u>レ</u> ダケ	ソ <u>ッ</u> デン

(6) 副詞の語末/ri/が/si/になる語の例

標準語形	方言形
ヤッ <u>パ</u> リ	ヤッ <u>パ</u> シ
コレ <u>ッ</u> キリ	コレ <u>ッ</u> キシ
スコシ <u>バ</u> カリ(少しばかり)	チツ <u>ト</u> バカシ

(7) 動詞の否定形で語幹末付近の/r/が撥音になる語の例

標準語形	方言形
ミ <u>ラ</u> レナイ(見られない)	ミ <u>ラ</u> ンネー
シ <u>ラ</u> ナイ(知らない)	シ <u>ン</u> ネー

タ <u>ラ</u> (<u>リ</u>)ナイ(足らない)	タ <u>ン</u> ネー
ト <u>ラ</u> ナイ(取らない)	ト <u>ン</u> ネー

まず、(1)は、標準語における/k/が/g/に対応する語の例である。中でも動詞「イク(行く)」を「イグ」と発音する例は、現在でも中高年を中心に広く用いられている。70歳以上の高年層のほか、それ以下の年齢でも見られる。/k/が/g/に対応する現象は、語頭、語中の母音間において見られるが、全ての語に規則的に働くわけではない。藤原(1979)は、「ガバン(鞆)」、「ガニ(蟹)」の例も挙げているが、現在では、方言形での発音は消滅していると考えられる。また、「サケ」や「トケイ」なども、「サゲ」、「トゲー」にはならず標準語形である。

(2)は、/d/が/z/に対応する語の例である。この現象は、先に挙げた/d/が/z/で発音される現象よりも適用範囲が広いと考えられる。この現象は語頭には見られない。「ドウロ(道路)」や「ダルマ(達磨)」は標準語形と同じように発音される。

(3)は、語中の/mu/が/bu/に対応する語の例である。この現象も適用範囲が広く、規則的である。「サムイ」が「サブイ」、「ケムイ」が「ケブイ」となるなどの発音は、若年層の間でも見られる。

(4)は、疑問詞「ナニ」もしくは「ナゼ(なんで)」の語頭の/n/が脱落する現象の語の例である。市原市方言特有の言い回しである「あんとんねー」も、標準語形「何ともない」の語頭の/n/が脱落した結果である。

(5)は、形態素境界のラ行音が促音で発音される語の例である。

(6)は、副詞において、語末の/ri/が/si/に対応する語の例である。この現象は副詞にのみ見られ他の品詞では見られない。

(7)は、動詞の否定形における語幹末付近の/r/が撥音に対応する語の例である。この現象は、動詞の活用語尾に見られる。

3.1.2. 母音の特徴

市原市方言では、母音融合が起こりやすい。連母音/ai/、/ae/、/oi/は[e:]に変化し、/ui/は[i:]となる。

母音融合

(8)標準語[ai] : 市原市方言[e:]

標準語形	方言形
タ <u>カ</u> イ(高い)	タ <u>ケ</u> ー

コワイ(怖い) コエー

(9)標準語[ae] : 市原市方言[e:]

標準語形	方言形
オ <u>マ</u> エ(お前)	オ <u>メ</u> ー
オ <u>サ</u> エル	オ <u>セ</u> ール
コ <u>サ</u> エル(こしらえる)	コ <u>セ</u> ール
<u>カ</u> エル(帰る)	<u>ケ</u> ール
<u>カ</u> エル(蛙)	<u>ゲ</u> ール

(10)標準語[oi] : 市原市方言[e:]

標準語形	方言形
ツ <u>ヨ</u> イ(強い)	ツ <u>エ</u> ー
ス <u>ゴ</u> イ(凄い)	ス <u>ゲ</u> ー

(11)標準語[ui] : 市原市方言[i:]

標準語形	方言形
ヒ <u>ク</u> イ(低い)	ヒ <u>キ</u> ー
サム <u>イ</u> (寒い)	サム <u>ビ</u> ー

例外的に標準語の「いたい(痛い)」[itai]は市原市方言では[itɕi:]となり、連母音[ai]に[e:]が対応するのではなく[i:]が対応する。「オイチー」や「アイチー」と言われるときは、突然どこかにぶついたりして痛みを感じた時に咄嗟に出る語であり、音韻的特徴というよりも特徴的な語彙に分類されるかもしれない。

(12)「いたい(痛い)」標準語[itai] : 市原市方言[itɕi:]

標準語形	方言形
オオ <u>イ</u> タイ(おお痛い)	オ <u>イ</u> チー
ア <u>ア</u> イタイ(ああ痛い)	ア <u>イ</u> チー

3.1.3. k 音脱落現象と k-h 現象

市原市方言の音韻に関する先行研究では、k 音脱落現象、そして k-h 現象を扱ったものが最も多い。k 音脱落現象とは、語中・語尾のカ行音がア行音化する現象である。一方、k-h 現象とは語中・語尾のカ行音がハ行音で発音される現象である。これらの現象は市原市の中でも地域差があり、前者は市の南部地域、つまり内陸部で見られ、後者は沿岸部の地域で見られるとされている。以下に、それぞれの概要と先行研究について紹介する。

3.1.3.1. k 音脱落現象

k 音脱落とは、語中・語尾のカ行音がア行音に対応する現象である。藤原(1979)は、k 音脱落は市原市の南部地域だけでなく、千葉県伝統方言がある安房・上総地域において広域に見られると述べている。

(13) k 音脱落現象

標準語形	方言形
ド <u>コ</u> (何処)	ド <u>ー</u>
ミ <u>ツ</u> キ(三月)	ミ <u>ツ</u> イ
カ <u>キ</u> (柿)	カ <u>イ</u>
カ <u>ク</u> (書く)	カ <u>ウ</u>
ト <u>キ</u> ド <u>キ</u> (時々)	ト <u>イ</u> ド <u>イ</u>

(13)の「ミツキ(三月)」は k 音脱落により「ミツイ」となるが、母音融合は生じない。k 音脱落で生じた母音連続に対しては、母音融合が適用されないことも特徴の1つである。また、k 音脱落は、伝統方言で書かれた民話の中にも見られる。例文は『千葉県の民話』からの引用である。()内は頁を表している。また、標準語訳は筆者が作成した。

(14) おうい、自分ばかり食ってねえで、こっちにもなげてくんろよ (48)

(おうい、自分ばかり食べていないで、こっちにも投げてくださいよ。)

藤原(1979)では、k 音が脱落する環境について、広母音から狭母音へ移る間の k 音脱落が、その反対の場合よりも圧倒的に多いと述べる。

また、藤原(1979)は、k 音脱落現象に関して、教育の普及やテレビ・ラジオの影響で脱落した k が復活する傾向にあると述べている。さらに、藤原(1975)によると、k 音脱落現象は、当時の老年

層が主に使用しており、若年層は/k/を復活して発音すると述べている。それゆえ、2019年現在ではk音脱落現象は、生産的な音韻プロセスとしてはほとんど消滅してしまっていると予想される。

3.1.3.2. k-h 現象

k-h 現象とは、語中・語尾のカ行音がハ行音で発音される現象である。k音脱落現象が内陸部の特徴であるのに対して、k-h 現象はかつて漁業が活発に行われていた沿岸部で見られる現象であった。

(15) k-h 現象

標準語形	方言形
ド <u>コ</u> エ(何処へ)	ド <u>ホ</u> エ
サ <u>ケ</u> (酒)	サ <u>ヘ</u>
サ <u>カ</u> ナ(肴)	サ <u>ハ</u> ナ

谷萩(1971)は、k-h 現象に関して、予備調査を市原市の10地点で、本調査を沿岸部の西青柳地区で行った。その調査によって、k-h 現象は沿岸部の地域、つまりかつて漁業が行われていた地域でのみ観察された。また、話者の内省も調査したところ、k-h 現象は沿岸部の漁業関係者が使う「どへっこば」の1つであるという意識も共通して持っていた。谷萩(1971)によると、k-h 現象は市原市の他に伊豆大島などの、同じく漁業が盛んな地域で観察されている。また、谷萩(1971)は、話者の意識として「荒波での仕事にそんな丁寧な事は言っていられない」という意識があることを指摘し、k-h 現象が生じた要因の1つと見なしている。

岡野(1981)は、谷萩(1971)の調査のちょうど10年後である1981年に青柳周辺地域でk-h 現象を調査した。谷萩(1971)の調査と比べ、岡野(1981)の調査では、k音を標準語的に発音する場合が多く見られ、予想以上に消滅にさしかかっていると考察している。また、当時の調査でk-h 現象が見られたのは、漁業が行われていた地域の高齢者層のみであるということから、k-h 現象の残存率が高いほど、漁業依存度が高いと結論づけている。

市原市では、1957年から海岸が埋め立てられ、企業の工場建設・操業が進んだ。そのため、漁業ができなくなり「どへっこば」を使う人も徐々に減っていったと思われる。2019年2月に、80代話者に聞き取り調査をしたところ、k音脱落やk-h 現象は現在聞かれることはないと言っていた。一方、沿岸部地域の人々の言葉は「粗い」印象があり、当時の漁業関係者などはそのような発音をしていたかもしれないとのことだった。

以上のことから、k 音脱落現象と k-h 現象の衰退の背景には教育やメディアの発達・普及だけでなく産業構造の変化があるものと考えられる。

3.2. アクセント

市原市方言のアクセントについて言及した最も古い文献は、金田一(1942)である。この論文の中で金田一は、市原市方言のアクセントを房総アクセントと呼んでいる。また、藤原(1972)及び藤原(1979)は市原市のアクセントの記述的研究を行った。いずれの資料においても、市原市方言のアクセントは概ね標準語アクセントと類似しているながらも特異な点があると指摘している。つまり、最初のモーラと次のモーラが同じ高さになる構造が可能である点や、第2モーラの母音が広いか狭いかによってアクセントが変わることがある点が特徴である。語頭の2つのモーラが同じ高さになる市原市方言の特徴は、標準語には見られないものと言える。また、後者に関しては、名詞のモーラ数によって規則は異なるものの、主に第2モーラの母音が広母音か狭母音かによって上昇、下降の遅れが発生する。モーラごとの詳しい傾向は、次節以降で語例とともに示す。なお、本研究において、アクセントに関する聞き取り調査及び継承に関する調査は行わなかった。したがって、本論文におけるアクセントの記述は、全てが先行研究で記述されたアクセント形式である。主に藤原(1972)と藤原(1979)を参照するが、藤原の論文内で1音節名詞、2音節名詞、のように「音節」で言及されているものが実際にはモーラに対応するため、本論文では単語のモーラ数ごとにアクセントを示す。

アクセントの図式は、金田一・柴田(1959)『NHK 全国方言資料』で採用されている方法に従う。この方法は、藤原(1972)でも用いられている。また、アクセントの上昇、下降の表記法は、上野(2006)が提唱した方法を用いる。以下に例を示す。

例. 藤原(1972)より

図式

○, ●は当該語のモーラを、▷, ▶は続く助詞を表す。

また、●, ▶は高位を、○, ▷は低位を表す。

□, ■はそれに続く語の第1モーラを表す。

表記

低から高に向かうところは「[」で表し、高から低に向かうところは「]」で表す。

表 2. アクセント表記の例

図式	語例	表記
○ ▶	日	ヒ[
● ▶	火	[ヒ]
○ ● ▶	鼻	ハ[ナ
○ ● ▶	花	ハ[ナ]
○ ● ● ▶	畑	ハ[タケ
○ ● ● ▶	頭	ア[タマ]
○ ● ○ ▶	小麦	コ[ム]ギ
● ○ ○ ▶	錦	[ニ]シキ

3.2.1. 1モーラの名詞

表 3. 1モーラ名詞のアクセントの種類

型	図式	当該語の母音	語例	表記	
第1型	1	○ ▶	全ての母音	葉, 柄, 日	ハ[, エ[, ヒ]
第2型	2a	● ▶	a, o, e	歯, 絵, 穂	[ハ], [エ], [ホ]
	2b	● ▶ □	i, u	火, 酢	[ヒが], [スを]

第1型はアクセント核のない型、第2型はアクセント核のある型である。2a型は当該語の母音が a, o, e の語であり、2b型は母音が i, u のものである。1型ないし2a型は標準語アクセントと同様であるが、2b型は異なっている。標準語アクセントでは2b型に属する語も、2a型と同じように次に来る助詞で下るが、市原市方言において、助詞は当該語と同じ高さを保つ。藤原(1972)、藤原(1979)によると、2b型に属する語は、次に助詞「が・は・を・も・と・で・へ・に」などがくると、その助詞のピッチが上ってその語と同じ高さを取り、さらにその次のモーラへ来て初めてピッチが下る点が標準語アクセントと異なっている。つまり、下るのが一拍遅れることになる。以下で、1モーラ名詞の2b型のアクセントと標準語アクセントの違いを示す。

表 4. 1モーラ名詞における2b型

語例	標準語アクセント	市原市方言
火が燃える	[ヒ]がモエル	[ヒが]モエル

火を燃す	[ヒ]をモス	[ヒを]モス
酢は好き	[ス]はスキ	[スは]スキ
酢で食べる	[ス]でタベル	[スで]タベル

3.2.2. 2モーラの名詞

表 5. 2モーラ名詞のアクセントの種類

型		図式	第2モーラ	語例	表記
第1型	1a	○ ● ▶	a, o, e	鼻, 顔, 飴	ハ[ナ]
	1b	○ ○ ▶ ■	i, u, N(撥音)	味, 蕪, 晩	アジ[
	1c	● ● ▶	a, o, e	塀, 棒, 蠅	[ヘー
第2型	2a	○ ● ▶	a, o, e	花, 竿, 夢	ハ[ナ]
	2b	○ ○ ▶ □	i, u	足, 夏	アシ[]
第3型	3a	● ○ ▶	i, u, N	秋, 松, 蘭	[ア]キ
	3b	● ● ▶	a, o, e	朝, 跡, 雨	[アサ]

藤原(1972)によると、第1型において、この群に属する語は全て、丁寧に発音するときや改まった口調で言うときなどには1a型になる。一方で、郷人同士の打ち解けた会話において、1b型になるものが見られる。それらは、第2モーラの母音がi, u等の狭母音、または撥音で終わる語で、次に広母音助詞(「が・は・を」など)や助動詞「だ・です」等を取る場合である。以下に1b型の例を示す。

表 6. 2モーラ名詞における1b型

語例	標準語アクセント	市原市方言
味が悪い	ア[ジがワル]イ	アジ[がワル]イ
蕪を買う	カ[ブをカウ]	カブ[をカウ]
菊も咲いた	キ[クモサイタ]	キク[モサイタ]

また、第1型の中で第1, 2モーラが同じ母音や連母音、もしくは長音化したときは1c型となり平板型となる。ある種の二重母音でもこの傾向がある。以下に1c型の例を示す。

表 7. 2モーラ名詞における1c型 (語の発音は市原市方言的に変化)

語例	標準語アクセント	市原市方言
----	----------	-------

塀が壊れた	へ[イがコワレ]タ	[へーがコワレ]タ
棒が折れた	ボ[ウがオ]レタ	[ボーがオ]レタ

第2型は標準語アクセントの尾高型に属するものであるが、当該語の第2モーラの母音が i, u である語は会話の中で 2b 型となる。つまり、第2モーラは上らずにそのままの高さにとどまり、次に来る助詞がその代わりに高くなり、さらにそれに続く語の第1モーラ(□)は再び下って元へ戻る。ただし、母音が i, u で終わる語でも次に来る助詞が「に、へ」の場合はこの変化は起こらない。

表 8. 2モーラ名詞における 2b 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
足が痛い	ア[シ]がイタイ	アシ[が]イタイ
足を洗う	ア[シ]をアラウ	アシ[を]アラウ
夏が来た	ナ[ツ]がキタ	ナツ[が]キタ
夏へ向かう	ナ[ツ]へムカウ	ナ[ツ]へムカウ (標準語と同じ)

第3型において、第2モーラの母音が a, o, e など広母音のものは市原市方言で 3b 型(●●>)となる。藤原(1979)は、3a 型と 3b 型のアクセントの違いは微妙であり、出身者以外には聞き分けが難しいと述べている。参考までに 3b 型の標準語アクセントとの違いを下の表に示す。

表 9. 2モーラ名詞における 3b 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
朝が来た	[ア]サがキタ	[アサ]がキタ
味噌を入れる	[ミ]ソをイレル	[ミノ]をイレル

3.2.3. 3モーラの名詞

表 10. 3モーラ名詞のアクセントの種類

型		図式	第2モーラ	例	表記
第1型	1a	○ ● ● ▶	a, o, e	畠、子供、蛙	ハ[タケ]
	1b	○ ○ ● ▶	i, u, N	扉、机、田圃	トビ[ラ]
	1c	● ● ● ▶	長音化、二重母音	氷、掃除、廊下	[コーリ]

第2型	2a	○ ● ● ▷	a, o, e	頭、男、裂け目	ア[タマ]
	2b	○ ○ ● ▷	i, u, N	明日、娘、女	アシ[タ]
	2c	● ● ● ▷	長音化、二重母音	峠、通り、タベ	[トーゲ]
第3型	3	○ ● ○ ▷	a, o, e, i, u	小麦、お菓子	コ[ム]ギ
第4型	4a	● ○ ○ ▷	i, u, N	錦、奥歯、暖炉	[ニ]シキ
	4b	● ● ○ ▷	a, o, e	朝日、緑、もみじ	[アサ]ヒ

第1型は平板型に属する語である。市原市方言では、その中で第2モーラが a, o, e を含むものは 1a 型に属し、標準語アクセントと同様の発音である。一方、第2モーラが i, u, N を含むものは 1b 型で発音される傾向がある。さらに、第1、2モーラが長音化したもの、もしくは二重母音となるものの中には 1c 型で発音される語がある。以下に 1b 型、1c 型における標準語アクセントとの違いを示す。

表 11. 3 モーラ名詞における 1b 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
扉を開ける	ト[ビラを]アケル	トビ[ラを]アケル
机を拭く	ツ[クエを]フク	ツク[エを]フク

表 12. 3 モーラ名詞における 1c 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
氷を食べる	コ[オリを]タベル	[コオリを]タベル
廊下を走る	ロ[ウカを]ハシル	[ロウカを]ハシル

第2型は、次へくる助詞が下がる尾高型に属する語である。市原市方言におけるアクセントの規則は第1型と同様に、第2モーラが a, o, e を含むものは標準語アクセントと同じ 2a 形で発音され、i, u, N を含むものは 2b 型で、第1、2モーラが長音化したもの、もしくは二重母音となるものの中には 2c 型で発音される傾向がある。以下に 2b 型、2c 型における標準語アクセントとの違いを示す。

表 13. 3 モーラ名詞における 2b 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
----	----------	-------

明日がある	ア[シタ]がアル	アシ[タ]がアル
娘がいる	ム[スメ]がイル	ムス[メ]がイル

表 14.3 モーラ名詞における 2c 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
峠を越える	ト[ウゲ]をコエル	[トウゲ]をコエル
通りが混む	ト[オリ]がコム	[トオリ]がコム

第3型は中高型に属する名詞である。市原市方言において中高型に属する名詞は、標準語アクセントにおける中高型の名詞と多くが共通しているが、藤原(1972)はそれとは異なるものとして「キウリ」や「硯」などを挙げている。しかし、第3型に属する語は比較的数量が少ないと述べている。以下に第3型の語例とアクセントを示す。なお、「お菓子」のアクセントは標準語と同じである。

表 15.3 モーラ名詞における第3型

語例	標準語アクセント	市原市方言
お菓子を買う	オ[カ]シをカウ	オ[カ]シをカウ
硯を使う	ス[ズリ]をツカウ	ス[ズ]リをツカウ

第4型は頭高型に属する語である。その中で、第2モーラが i, u, N を含むものは標準語アクセントと同様に発音され、4a型に属する。一方第2モーラが a, o, e を含むものは4b型に属し、アクセント核が1つ遅れて発音される。以下に4b型における標準語アクセントとの違いを示す。

表 16.3 モーラ名詞における 4b 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
朝日が昇る	[ア]サヒがノボル	[アサ]ヒがノボル
緑がある	[ミ]ドリがアル	[ミド]リがアル

3.2.4. 4モーラの名詞

表 17. 4モーラの名詞のアクセントの種類

型	図式	第2モーラ	例	表記	
第1型	1a	○●●●▶	a, o, e	雨垂、筍	タ[ケノコ

	1b	○○●●▶	i, u, N	虫干、約束	ムシ[ボシ]
	1c	●●●●▶	長音化、二重母音	栄養、宝石	[エーヨー]
第2型	2a	○●●●▶	a, o, e	鋸、花束	ノ[コギリ]
	2b	○○●●▶	i, u, N	足音、油絵	アシ[オト]
	2c	●●●●▶	長音化、二重母音	大雨、正月	[オーアメ]
第3型	3a	○●●○▶	a, o, e	玉ねぎ、山奥	タ[マネ]ギ
	3b	○○●○▶	i, u, N	間違、雷	マチ[ガ]イ
	3c	●●●○▶	長音化、二重母音	大声、大勢	[オーゴ]エ
第4型	4	○●○○▶	(例外)	雨雲、人々	ア[マ]グモ
第5型	5a	●○○○▶	i, u, N	挨拶、今晚	[ア]イサツ
	5b	●●○○▶	a, o, e	朝晩、イヤホン	[アサ]バン

第1型は、平板型に属する語である。市原市方言では、3モーラの名詞のアクセント規則と同様に、第2モーラが a, o, e を含むものは標準語アクセントと同じ 1a 型で発音される。第2モーラが i, u, N をとるものは 1b 型、長音化もしくは二重母音を含むものは 1c 型で発音され、標準語アクセントとは異なっている。以下に、1b 型、1c 型における標準語アクセントとの違いを示す。

表 18.4 モーラ名詞における 1b 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
紫陽花が咲く	ア[ジサイが]サク	アジ[サイが]サク
約束がある	ヤ[クソクが]アル	ヤク[ソクが]アル

表 19.4 モーラ名詞における 1c 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
栄養がある	エ[イヨウが]アル	[エーヨーが]アル
宝石がある	ホ[ウセキが]アル	[ホーセキが]アル

第2型は尾高型、第3型は中高型である。どちらの型においても、第1型と同様の規則でアクセントが変化する。つまり、第2モーラが a, o, e を含む 2a 型と 3a 型は標準語アクセントと同様であり、第2モーラが i, u, N や長音化、もしくは二重母音になった場合、アクセントが変化する。以下に、第2型の 2b、2c 型と第3型の 3b、3c 型における標準語アクセントとの違いを示す。

表 20.4 モーラ名詞における 2b 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
足音を立てる	ア[シオト]をタテル	アシ[オト]をタテル
油絵を習う	ア[ブラエ]をナラウ	アブ[ラエ]をナラウ

表 21.4 モーラ名詞における 2c 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
大雨になる	オ[オアメ]にナル	[オーアメ]にナル
正月になる	ショ[ウガツ]にナル	[ショーガツ]にナル

表 22.4 モーラ名詞における 3b 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
間違がある	マ[チガ]イガアル	マチ[ガ]イガアル
雷が鳴る	カ[ミナ]リガナル	カミ[ナ]リガナル

表 23.4 モーラ名詞における 3c 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
大声を出す	オ[オゴ]エをダス	[オーゴ]エをダス
大勢になる	オ[オゼ]イになる	[オーゼ]ーになる

藤原(1979)によると、標準語アクセントにおいて中高型○●○○▷に属する語の中で、第3モーラの母音が i, u、もしくは撥音か促音である語は、市原市方言においても標準語アクセントと同様である。(17)は、市原市方言において、中高型○●○○▷で発音される第4型の語例である。

(17)第4型に属する語例 藤原(1972)より

「雨雲、村々、山茶花、スタンプ、スランプ、ブランコ、あさって、人々、嘘つき、撫子、破廉恥、お天気、自転車、麒麟児」など

いずれも第3モーラが i, u であるか、もしくは撥音か促音である。

一方、標準語アクセントにおいて中高型○●○○▷に属する語の中で、第3モーラが広母音であ

る a, o, e の場合、市原市方言では第 3 型のアクセントになる。そのため、市原市方言で、中高型 ○●○○▷アクセントの第4型に属する語は少数であるとされる。表 24 は、標準語アクセントで中高型 ○●○○▷で発音される語の市原市方言の場合のアクセントを表している。

表 24. 標準語アクセントで中高型 ○●○○▷に属するが、市原市方言では異なる語

語例	標準語アクセント	市原市方言
朝顔が咲く	ア[サ]ガオがサク	ア[サガ]オがサク(3a 型)
花嫁がいる	ハ[ナ]ヨメがイル	ハ[ナヨ]メがイル(3a 型)
歯磨きをする	ハ[ミ]ガキをスル	ハミ[ガ]キをスル(3b 型)
尻餅をつく	シリ[リ]モチをツク	シリ[モ]チをツク(3b 型)

第5型に属する語は、標準語アクセントにおける頭高型の語である。市原市方言では、第 2 モーラの母音が i, u, N であるものは 5a 型に属し標準語アクセントと同様のアクセントである。一方で、第 2 モーラの母音が a, o, e であるものは 5b 型に属し標準語アクセントとは異なる。以下に、5b 型と標準語アクセントの違いを示す。

表 25. 4 モーラ名詞における 5b 型

語例	標準語アクセント	市原市方言
朝晩に行く	[ア]サバンにイク	[アサ]バンにイク
イヤホンを付ける	[イ]ヤホンをツケル	[イヤ]ホンをツケル

3.2.5. アクセントのまとめ

以上が先行研究で得られた市原市方言のアクセントの概要である。なお、名詞以外の品詞におけるアクセントは先行研究でほとんど言及されていない。金田一(1942)において、房総アクセントにおける未然形その他の活用アクセントは標準語と一致しない型のものが多いと述べられているが、具体的な記述はなかった。

本研究において、アクセントについての調査は一切行わなかったため、現在の市原市方言におけるアクセントの実態は分からない。内省としては、現在の伝統方言を話す話者であってもアクセントに関しては標準語アクセントと変わらないように感じる。いずれにせよ、市原市方言のアクセントの諸相については今後も調査する必要がある。

3.3. 形態的特徴

以下に市原市方言における、動詞の活用、形容詞の活用、そしてその他の形態的特徴を示す。挙げる例文のいくつかは、安藤(1980)『ふるさと千葉県の話』中の市原市の民話で実際に使われているものを引用した。その際、()内は頁を表している。また、先行研究で示されている例文を引用する際は、例えば「(藤原 1979)」のように示している。その他、どこからも引用せずに、本研究で聞き取り調査をした 80代話者の方言をもとに自作した例文は無標とした。

3.3.1. 動詞の活用

動詞の活用において、子音語幹動詞(以下、多段型動詞)の「行く」、不規則変化動詞の「来る」、「する」は市原市方言特有の活用が見られる。また、否定形接尾辞と非過去接続辞の組み合わせ /-na-i/ が [ne:] となる点、意志や推量、勧誘を表す用法で「べ/ぺ」が文末に用いられる点は、全ての動詞の活用において共通する特徴である。以下の表で、多段型動詞、母音語幹動詞(以下、一段型動詞)、不規則変化動詞「来る」、「する」の活用を示す。なお、多段型動詞の活用における、「そう(『言う』の意)」、「もす(『燃やす』の意)」は市原市方言の動詞語彙である。

活用の仕方については、藤原(1979)を参照しつつ、実際に80代と50代の市原市方言話者への聞き取り調査を行った結果として記述する。また、活用表のレイアウトおよび用語は、佐々木(2018)で使用されているものを採用した。

表 26. 多段型動詞の活用

終止形		行く	書く	立つ
終止類	断定非過去	イグ	カク	タツ
	断定過去	イッタ	カイタ	タッタ
	命令	イゲ、イケ	カケ、カエ	タテ
	禁止	イグナ、イクナ	カクナ、カーナ	タツナ
	意志	イグベ、イクベ	カクベ、 カーベ	タツベ
	推量	イグッペ、イグダッペ	カクダッペ、 カクッペ	タツッペ、 タツダッペ
	否定推量	イガネッペ	カカネッペ	タタネッペ
接	連体非過去	イグ	カク	タツ

	連体過去	イッタ	カイタ	タッタ
	中止	イッテ	カイテ	タッテ
	仮定	イゲバ、イッタバ、 イグダ(ッ)バ	カケバ、カイタバ、 カクダ(ッ)バ	タテバ、タッタバ、 タツダ(ッ)バ
	継起	イッタバ	カイタバ	タッタバ
派生類	否定	イガネー	カカネー	タタネー
	丁寧	該当形 欠	該当形 欠	該当形 欠
	使役	イガセル、イカセル	カカセル	タタセル
	受身	イガレル、イカレル	カカレル	タタレル
	可能	イガレル、イカレル	カケル	タテル
	尊敬	該当形 欠	該当形 欠	該当形 欠
	継続	イッテル	カイテル	タッテル
	希望	イギテー	カキテー	タチテー
	ノダ	イグダ	カクダ	タツダ

	終止形	そう(=言う)	燃す(=燃やす)
終止類	断定非過去	ソウ	モス
	断定過去	ソイタ	モシタ
	命令	ユエ	モセ
	禁止	ユウナ、ソウナ	モスナ
	意志	ソウベ	モスベ
	推量	ソウツペ、ソウダツペ	モスツペ、モスダツペ
	否定推量	ソワネツペ	モサネツペ
接続類	連体非過去	ソウ	モス
	連体過去	ソイタ	モシタ
	中止	ソイテ	モシテ
	仮定	ソエバ、ソイタバ ソウダ(ッ)バ	モセバ、モシタバ モスダ(ッ)バ
	継起	ソイタバ	モシタバ

派生類	否定	ソフネー	モサネー
	丁寧	該当形 欠	該当形 欠
	使役	ソフセル	モサセル
	受身	ソフレル	モサレル
	可能	ソフレル、ソエル	モセル
	尊敬	該当形 欠	該当形 欠
	継続	ソイテル	モシテル
	希望	ソイテー	モシテー
	ノダ	ソウダ、ソイタダ	モスダ

表 27. 一段型動詞の活用

終止形		見る	起きる	越える
終止類	断定非過去	ミル	オキル	コエル
	断定過去	ミタ	オキタ	コエタ
	命令	ミロ	オキロ	コエロ
	禁止	ミンナ	オキルナ	コエルナ
	意志	ミベー	オキベ	コエベ
	推量	ミンダツペ、ミツダツペ	オキルツペ、オキツペ、 オキンダツペ	コエルツペ、コエツ ペ、コエンダツペ
	否定推量	ミネーツペ	オキネツペ	コエネーベ、 コエネツペ
接続類	連体非過去	ミル	オキル	コエル
	連体過去	ミタ	オキタ	コエタ
	中止	ミテ	オキテ	コエテ
	仮定	ミレバ、ミタバ、 ミンダ(ツ)バ	オキレバ、オキタバ、 オキンダ(ツ)バ	コエレバ、コエタバ、 コエンダ(ツ)バ
	継起	ミタバ	オキタバ	コエタバ
派生類	否定	ミネー	オキネー	コエネー
	丁寧	該当形 欠	該当形 欠	該当形 欠

	使役	ミサセル	オキサセル	コエサセル
	受身	ミラレル	オキラレル	コエラレル
	可能	ミラレル	オキラレル	コエラレル
	尊敬	該当形 欠	該当形 欠	該当形 欠
	継続	ミテル	オキテル	コエテル
	希望	ミテー	オキテー	コエテー
	ノダ	ミンダ、ミッダ	オキルダ、オキンダ	コエルダ、コエッダ

表 28. 不規則変化動詞の活用

	終止形	来る	する
終止類	断定非過去	クル	スル
	断定過去	キタ	シタ
	命令	コー	シロ
	禁止	クナ	スルナ
	意志	キベー、クベー	シベー、スッベ
	推量	クーベ、クルッペ、クンダッペ、 クッダッペ	シッダッペ、スンダッペ、 スッダッペ
	否定推量	キネーッペ、キネーベ	シネッペ、シネーベ
接続類	連体非過去	クル	スル
	連体過去	キタ	シタ
	中止	キテ	シテ
	仮定	キレバ、キタバ、クンダ(ッ)バ	シレバ、シタバ、スンダ(ッ)バ シンダバ
	継起	キタバ	シタバ
派生類	否定	キネー	シネー
	丁寧	該当形 欠	該当形 欠
	使役	キサセル、コサセル	サセル
	受身	キラレル	サレル
	可能	キラレル	該当形 欠

	尊敬	該当形 欠	該当形 欠
	継続	キテル	シテル
	希望	キテー	シテー
	ノダ	クッダ、クンダ	スッダ、シンダ

「終止類」の活用の仕方に関して、市原市方言では、意思や推量を表す際に文末詞の「べ/ぺ」が用いられる。藤原(1979)によると、市原市方言では、「べ」と「ぺ」は意味用法が異なり、「べ」は意思と勧誘の意味を表し、「ぺ」は推量の意味を表す。

意思や勧誘を表す「べ」は、動詞の終止形もしくは連用形、未然形に接続する。以下に、文末詞「べ/ぺ」の例を示す。

意思または勧誘を表す「べ」

・動詞終止形に接続

(18) そっじゃ、わしが塩水の出る井戸を掘ってやるべえ。 [意思] (71)

(それじゃあ、私が塩水の出る井戸を掘ってあげよう。)

(19) そんなタスキがけた蛇は、ゆうら(いくら) はずすべえとしても、はずせねえったって。

[意思] (73)

(そのタスキがけた蛇は、いくらはずそうとしても、はずせなかったって。)

(20) 大きな桃を拾ってきたかん、二人で割って食うべ。 [勧誘] (120)

(大きな桃を拾ってきたから、二人で割って食べよう。)

・動詞未然形または連用形に接続

(21) それじゃ、みんなで村からぶんどってきた酒とさかなで、飲むとしべーや。 [勧誘] (128)

(それじゃあ、みんなで村から取ってきた酒とさかなで、飲むとしようよ。)

(22) 泥棒は、とるべきもんをうんととって、荷をこって、出べえと思ったけん、 [意思] (183)

(泥棒は、とるべきものをうんととって、荷作りして、出ようと思ったけど、)

推量を表す「ぺ」は、動詞の終止形に接続、もしくは終止形に「だっぺ」が接続する形で表される。動詞に直接接続される「べ」と異なり、必ず「ぺ」は促音を伴う。動詞の断定過去形や否定形、形容詞にも接続する。形容詞については、3.3.2.で言及する。

推量を表す「ペ」及び「ダッペ」

- ・動詞終止形に接続

(23) もうすぐ帰ってくっだっぺ。(もうすぐ帰ってくるだろう。)

- ・動詞断定過去形に接続

(24) そういう風にそいたっぺ。(そういう風に言っただろう。)

「接続類」に関して、連体非過去形、連体過去形、中止形の活用の仕方は標準語と同様である。仮定形では、「(レ)バ」もしくは「タバ」で終わる形式がある。つまり、標準語形では「(レ)バ」もしくは「タラ」になるところを市原市方言では「タバ、タッバ」と言う。また、「終止形+ダバ、ダッバ」という言い方もある。「(レ)バ」の場合、多段型動詞は「エ段形+バ」、一段型動詞は「語幹+レバ」、不規則変化動詞の「来る」は「キ+レバ」、「する」は「シ+レバ」となる。「タバ、タッバ(ダバ、ダッバ)」の場合は、いずれの動詞群においても「断定過去形+バ」となる。

仮定形

(25) 明日は正月だかん、年越しの品物や、食べ物そろえねば、おいねーね。(58)

(明日は正月だから、年越しの品物や、食べ物をそろえなければ、いけないね。)

(26) じゃ、おめえは鬼ヶ島へ鬼退治に行くだっば、おれが刀を買ってやる。(120)

(じゃあ、お前は鬼ヶ島へ鬼退治に行くのならば、おれが刀を買ってやる。)

継起形とは、従属節の事態が起きると主節の事態が起こる継起的連続を表す形式である。(佐々木 2018)

「断定過去形+バ」

(27) おめえが前に米がこぼれたっば、おめえ拾うがい。(45)

(お前の前に米がこぼれたら、お前が拾いなさい)

「派生類」に関して、継続形の活用の仕方は標準語と同様である。丁寧形、尊敬形にあたる動詞の活用は市原市方言では存在しない。否定接尾辞と非過去接尾辞の組み合わせ/-na-i/が市原市方言では[ne:]となる。可能形においては、特異な活用型になる動詞があり、多段型動詞の「行く」は、「イガレル」となる。また、不規則変化動詞「来る」の可能形は「キラレル」となる。「来る」は、そ

の他の活用形においても、否定形が「キネー」、使役形が「キサセル」になるなど、特徴的な活用の仕方を示す。

ノダ形において、市原市方言ではノダ形の「の」が脱落する現象が顕著に見られる。動詞の終止形もしくは過去形に「だ」が直接接続する。動詞の終止形の文末「る」が促音になって接続する場合も多い。

ノダ形

(28) むかし、ある所にじいさんと、ばあさんがいただって。(45)

(むかし、ある所にじいさんと、ばあさんがいたんだって。)

(29) おらは、ここで観音様のお守りをさせてもらっているだよ。(63)

(私は、ここで観音様のお守りをさせてもらっているんだよ。)

(30) この山をもっともっと奥へ歩いていくと、住んでいったよ。(126)

(この山をもっともっと奥へ歩いていくと、住んでいるんだよ。)

3.3.2. 形容詞の活用

形容詞の活用においても、藤原(1979)を参照しつつ、80代と50代の市原市方言話者への聞き取り調査を行った結果として記述する。また、活用表のレイアウトおよび用語も動詞の活用と同様に、佐々木(2018)で使用されているものを採用した。

「大きい」は市原市方言の語彙で「いっけー」もしくは「でっけー」となる。「小さい」も市原市方言では「ちゃっけー」となり、「ちーちゃっけー」もしくは「ちっちゃっけー」という言い方も同様の意味で用いられている。

表 29. 形容詞の活用

終止形		高い	低い	大きい	小さい
終止類	断定非過去	タケー	ヒキー	イッケー、デッケー	チャッケー
	断定過去	タケカッタ	ヒキカッタ	イッケカッタ、デッケカッタ	チャッケカッタ
	推量	タケッペ	ヒキッペ	イッケッペ、デッケッペ	チャッケッペ

	否定推量	タケクネッペ	ヒクウネッペ、 ヒキクネッペ	イッケクネッペ、 デッケクネッペ	チャッケクネッペ
接続類	連体非過去	タケー	ヒキー	イッキー、デッケ ー	チャッキー
	連体過去	タケカッタ	ヒキカッタ	イッケカッタ、デ ッケカッタ	チャッケカッタ
	中止	タケクテ	ヒククテ、 ヒキクテ	イッケクテ、デッ ケクテ	チャッケクテ
	仮定	タケカッタバ	ヒキカッタバ	イッケカッタバ、 イッケクラ、デッ ケクラ	チャッケカッタバ
派生類	否定	タケクネー	ヒクウネー、 ヒキクネー	イッケクネー、 デッケクネー	チャッケクネー、 チャッカクネー
	なる	タケクナル	ヒクウナル、 ヒキクナル	イッケクナル、デ ッケクナル	チャッケクナル、 チャッカクナル
	丁寧	該当形 欠	該当形 欠	該当形 欠	該当形 欠
	ノダ	タケーダ	ヒキーダ	イッキーダ、デッ ケーダ	チャッキーダ

終止形		明るい	暗い	黒い	良い
終止類	断定非過去	アカリー	クレー	クレー	イー
	断定過去	アカリカッタ	クレカッタ	クレカッタ	イカッタ
	推量	アカリッペ	クレーッペ	クレーッペ	イーッペ
	否定推量	アカリクネー、 アカルクネー	クレクネッペ	クレクネッペ、 クロクネッペ	イクネー
接続類	連体非過去	アカリー	クレー	クレー	イー
	連体過去	アカリカッタ	クレカッタ	クレカッタ	イカッタ
	中止	アカルクテ	クレクテ	クレクテ	イクテ
	仮定	アカリケバ、	クレカッタバ	クレカッタバ	イカッタバ

		アカリカッタバ			
派 生 類	否定	アカルクネー	クレクネー	クレクネー、 クロクネー	イクネー
	なる	アカルクナル	クレクナル	クレクナル、 クロクナル	イクナル、 ヨクナル
	丁寧	該当形 欠	該当形 欠	該当形 欠	該当形 欠
	ノダ	アカリーダ	クレーダ	クレーダ	イーダ

形容詞は、語幹に母音融合の規則が働き、断定非過去形が長音化する語が多い。「良い」は、語幹「イ」がいずれの活用においても保たれる。

推量を表す際は、動詞の場合と同様に「ペ」が接続される。形容詞語幹に促音を伴って「ペ」が接続される形が最も一般的であるが、様々なバリエーションがある。

形容詞の推量形

(31) タカエツペ(タケツペ)、タカカツペ、タカアツペ、タカエダツペ(タケーダツペ) (藤原 1979)

否定形も、動詞の場合と同様に/nai/が[ne:]となる。また、ノダ形も動詞の場合と同様に「ノ」が脱落する。断定非過去形もしくは断定過去形に「ダ」が接続する。

ノダ形

(32) おっかさん、おらーあつだ、屁ーたれてえが、がまんしてつもんだかん、そつで色がわりいだ。

(181)

(お母さん、私は屁をしたいが、我慢してるものなので、それで(顔)色が悪いんです。)

3.3.3. その他の形態的特徴

上記で言及したこと以外の形態的特徴について以下に示す。

3.3.3.1. 疑問を表す助詞「カ」の方言形「ガン」

疑問を表す助詞「カ」にほぼ相当する。単文で使われることもあるが、頻度的には複文の文中で使われることが多い。

単文

(33) 今日はさびーがん。(今日は寒いかな。)(藤原 1979)

(34) あじしべがん。(どうしようか。)(藤原 1979)

複文

(35) 鬼が、あにしてるがん見て来う(鬼が、何をしているか見て来よう。)(122)

(36) くるがんきねーがんわからねー。(来るか来ないかわからない。)(藤原 1979)

(37) やめ(る)べがんと思ってる。(やめようかと思ってる。)(藤原 1979)

3.3.3.2. 経験者格助詞「ガン」、「ガニ」

「ガン」もしくは「ガニ」の形で、経験者や受益者を表すことができる。(38)、(39)は経験者を、(40)は受益者を表す。

(38) お(れ)がんもわからねー。(俺にもわからない)

市原市方言では一人称「おれ」が、略されて「お」になる場合が多い。

(39) お(れ)がには(おれがんにゃ)できねー。(俺にはできない。)(藤原 1979)

(40) こどもんがんとっておけ。(子供のためにとっておけ。)(藤原 1979)

3.3.3.3. 所有を表す「ガ」

「ガ」の後ろに名詞がくると、所有を表す。

(41) お(ら)がのだよ。(わたしのものだよ。)[「が+形式名詞『の』」]

(42) おらがうち。(私の家)

また、「○○(人称詞)が」で「○○の家」と言う意味になる。これは、英語において、“yours”や“○’s”のように、所有格だけで「○○の家」を表す用法と類似している。「…の家」「…の家」、「…の家庭」、「…の家族」などの意味の名詞は省略可能である。

よその家の屋号には、「ノガ」「ンガ」をつけて「シntax(屋号)ノガ/ンガ」という。(藤原 1979)

(43) おらあ、嫁をもらいてえが、おらがは、あに(何)しろ貧乏で、ろくすっぽ食う物もねえ。(108)

(俺は、嫁をもらいたいが、俺の家は、何しろ貧乏で、ろくに食べるものもない。)

(44) こーやんがは、今日田植えだ。(藤原 1979)

(こーや(屋号)の家は今日田植えだ。)

(45) 「にしらがえごか?」「うん、おらがへこーよ。」(藤原 1979)

(「お前の家に行こうか?」「うん、俺の家へきなよ」)

3.3.3.4. 場所を表す格助詞「ナ」を伴った連体修飾句

「自宅の裏にある家」という意味の「裏の家(いえ、うち)」という表現における「ノ」は、市原市方言で「ナ」で表す。しかし、「ナ」で表すものは、「裏」や「上」、「下」など相対的な場所の表現に限られ地名などには適用されない。

(46) 上な田、下な田 (上の田んぼ、下の田んぼ)

所有する田んぼが2つある場合に、上記のような表現で区別される。

(47) 裏なうち (裏の家)

(48) *二日市場なうち

二日市場は地名であり、この場合は「二日市場のうち」となる。

3.3.3.5. 命令・勧誘の「ガイ」

動詞の終止形について、軽い命令・勧誘の意を表す。

(49) おめえが前にこぼれたっば、おめえ拾うがい。(45)

(お前の前に米がこぼれたら、お前が拾いなさい)

(50) めえおつけ煮てたかん食うがい。(45)

(美味いおみおつけに煮てたところだから、食べなよ。)

(51) 外は寒いかんは早うもどって来るがいね。(58)

(外は寒いから早く戻ってきてくださいね。)

3.3.3.6. 主題を表す「オッパ」

係助詞「ハ」に相当する。

(52) おらおっばおえなえことしたさ。(私はいけない事をしたさ。)(藤原 1979)

(53) わたしの生まれおっば〇〇です。(私の生まれは〇〇です。)(藤原 1979)

3.3.3.7. 継起の「ト」に相当する「クレー」

動詞の過去形に接続し、「…すると」の意を表す。また、「クレー」は過去形以外には接続することができない。

(54) そんなまねして、落ちたくクレーおいねーぞ。(そんなまねして落ちるといけないぞ。)

(藤原 1979)

3.3.3.8. 接続助詞「ケンガ」

接続助詞「ケレド」に相当する。現在では、標準語「ケレド」と方言形「ケンガ」が合わさり、「ケンド」と言われる場合もある。接続詞として、句の始めにくるときは「ダケンガ」が用いられる。(藤原 1979)

(55) だけんがね、かには木にのぼれねえから困ってしまったって。(48)

(だけれどね、カニは木に登れないから困ってしまったって。)

(56) ちょうど、その家の人は、地ばたしを織っていたものだから、糸を腰からはずすのが、えらく容易じゃなかったけんが。(71)

(ちょうど、その家の人は、地ばたし(すわって織る機)を織っていたものだから、糸を腰からはずすのが、大変容易ではなかったけれど、)

3.3.3.9. 「…という」という意を表す「チ、ツチ」

「名詞または文+(ツ)チ」もしくは文末に「(ツ)チ」が接続して「…という」と言う意味になる。「何というもの」は「アンチモン」となり、最もよく使われる。藤原(1979)によると、直前が撥音の時は「チ」、直前が/i/もしくは/e/のときは「チ」または「ツチ」、直前が/a/または/o/のときは「ツチ」となる。

(57) そら、あんチもんだ？(それは何というものだ？)(藤原 1979)

(58) こるが、テレビツチもんだよ。(これがテレビというものだよ。)(藤原 1979)

(59) ハー ナンネンニ ナルツチ (もう何年になると言うのか。)(藤原 1979)

3.4. 特徴的語彙

市原市方言の語彙に関しては、平山(1974)、藤原(1979)の記述的研究がある。また、落合・谷島(2007)、佐倉(2007)は、市原市方言の語彙集を出版している。先行研究では約 5000 語の語彙が記述されているが、すでに使われなくなったものや、現在高年層などごく一部の人々しか使わない

ものが多い。ここでは記述された全ての語彙を記述することはできないが、中でも特徴的であると
考えられる語彙を挙げる。なお、例文の記載は「3.3. 形態的特徴」と同様に、『ふるさと千葉県の話』
から引用したものには()内に頁を、先行研究で得られたものには、例えば(藤原 1979)のよう
に記載し、自作した例文は無標とする。

3.4.1. 動词语彙

うっちゃる(捨てる)/うなる(耕す)/おっぺす(押す)/おせーる(捕まえる)/けっぼる(蹴る)/
こせーる(作る)/ぼっこす(壊す)/そう(言う)/だす(あげる、与えると言う意味で)/ひっくりけーる
(転ぶ)/ぶつつある(おんぶする)/もす(燃やす)/むらす(漏らす) など

「おせーる」は「おさえる」が母音融合した形、「こせーる」も「こしらえる」が短縮化され「こさえる」
になり、さらに母音融合した形である。標準語との意味のズレがあるものもいくつかあり、「おせー
る」、「だす」、「ひっくり返る」、「むらす」などがそれに当たる。中でも「だす」は、本来の意味の他に
「あげる、与える」という意味で用いられる。「やる」という言い方も同様に用いられている。

「だす」(あげる、与えると言う意味で)

(60) 孫に汽車賃をだしただよ。(孫に汽車賃(交通費)をあげたんだよ。)

3.4.2. 形容词语彙

いっけー(大きい)/おっかねー(怖い、恐ろしい)/ちーちゃっけー、ちっちやっけー(小さい)/はれ
わりー(寂しい)/ひゃっこい(冷たい)/いちー(痛い) など

「大きい」の方言形は「いっけー」である。「でっけー」も同義で用いられている。「怖い」、「恐ろし
い」の方言形は「おっかねー」であり、「こわい(こえー)」は、「疲れる、疲れた」という意味で用いら
れる。本来の意味の「怖い」は形容詞であるが、方言形「こえー」の意味である「疲れる、疲れた」は
動詞であるため、「3.4.4. その他の語彙」に分類した。

「こえー」(疲れた)

(61) おーこえー。(ああ疲れた。)

(62) こえーから、もうあるけねーだよ。(つかれたから、もう歩けないんだよ。)

3.4.3. 名詞語彙

あおなじみ(青あざ)/かまちよちよ(とかげ)/げーる(カエル)/けっこ(貝類)/どんぼ(とんぼ)/ぎょーかんやすみ(業間休み)(2時間目と3時間目の間の休み時間)/しこ、しこてき(服装、いでたち)/ずるこみ(横入り)/なんとば(お墓)/にし、にっしゃ(お前) など

「あおなじみ」は「青あざ」の方言形であり、主に茨城県と千葉県で言われている。

「とかげ」を意味する「かまちよちよ」は、その他の言い方で「かまきつちよ」、「かまくちよ」などがある。また、「カエル」の方言形も「げーる」の他、「げーろ」、「あんご」などが記述されている(平山 1974)、(藤原 1979)。

藤原(1979)によると、市原市方言では、小さいものや親しいものを表す際に接尾辞「こ」が用いられ、「けっこ(貝類)」もその特徴が現れている語彙である。藤原(1979)はその他の「こ」が付く語彙として、「ふなっこ(鮎)」、「かめんこ(亀)」などを挙げている。

「業間休み(2時間目と3時間目の間の休み時間)」は主に小学校で用いられる語彙である。

「にし、にっしゃ(お前)」は、80代話者によると、男性的な言い方で、荒いイメージがあるという。

3.4.4. その他の語彙

あんとんねー(何ともない)/おいねー(いけない、どうしようもない)/おっさ(そうだよ)/こえー(疲れた)/ちゃんがれ(どけ)/はんぶんずっこ(半分ずっこ)(半分ずつ) など

「あんとんねー」は、「何ともない」の疑問詞「何」の語頭/n/音が脱落し、否定辞「ない」に母音融合が起こり「ねー」に変化した形である。

「おっさ」は肯定の時に発する相槌の語彙である。また、特にそれ程の意味もなく、発話の相槌に使うことがある(藤原 1979)。市原市のマスコットキャラクターである「オッサくん」の名前は、この方言語彙が由来である。

4. 調査概要

4.1. 調査対象

市原市内の22校ある中学校のうち、3つの中学校すなわち市原市立市原中学校、市原市立東海中学校、市原市立三和中学校に通う1~3年生の生徒310名を対象にアンケート調査を実施した。データの分析は、310名のうち千葉県市原市出身もしくは千葉県内出身の305名を対象とし

た。

表 30 は、調査協力者の性別、年齢、出身地(3 歳から 12 歳まで最も長く住んでいた地域)のそれぞれの人数の内訳である。また、図 4 ではそれぞれの調査協力校を地図で示している。

市原中学校の学区は、他の調査協力校と同様に先祖代々その土地に住んでいる家庭も多く、水田や畑などもあり、農業も行われている地域である。しかし、一部市街化区域であり、中には他の地域から移住してきた家庭もある。沿岸部と内陸部に関しては、どちらかという内陸部寄りの場所に位置する。

東海中学校の学区は五井地区に属し、本研究における調査協力校の中では最も沿岸部寄りである。新興住宅地はなく、先祖代々その土地に住み続けている家庭が多数を占める。そのため、祖父母と同居している、もしくは近所に親戚が住んでいる家庭が多い(祖父母との同居割合など、詳しい割合は「5.調査結果」で述べる)。また、農業も盛んな地域であり、水田や畑、梨畑が多く、専業ないし兼業で農業を営む家庭が多い。

三和中学校の学区は、東海中学校の学区と同様に新興住宅地はなく、先祖代々その土地に住んでいる家庭が多数を占めている。また、農業が盛んな地域であることや、祖父母との同居率が高いことも東海中学校の学区と共通している。調査協力校の中では最も内陸部に位置する。

表 30. 調査協力者の情報

性別	男性	138 名
	女性	167 名
	無回答	5 名
年齢	12 歳	95 名
	13 歳	79 名
	14 歳	113 名
	15 歳	15 名
	無回答	8 名
出身地	市原市内	301 名
	市原市以外の千葉県内	5 名
	千葉県外	4 名
中学校	市原中学校	117 名
	東海中学校	73 名
	三和中学校	120 名
合計		310 名



図 4. 調査協力校の位置関係

4.2. 調査内容

アンケートは、以下の項目から成る。

0. 協力者に関する情報の記入

性別(男か女か)を選択し、年齢と出身地(3歳から 12 歳まで最も長く住んでいた地域)について、記入をしてもらう。

1. 協力者の方言認知、言語環境に関する質問

- 1.1. 千葉県市原市に方言があることを知っているかどうか。
- 1.2. 祖父または祖母と同居しているかどうか。
- 1.3. 自分を含めて、家族の中で千葉県の方言もしくは方言と思われる言葉を使っている人がいるかどうか。
- 1.4. 「いる」と答えた場合、方言を使っている人の続柄を記入する。

1.1.と 1.2.の質問に関して、現在残存する方言話者の多くは、中学生にとっての祖父母世代もしくは曾祖父曾祖母世代であると考えられる。したがって祖父母と同居しているかどうかは、方言の継承、もしくは方言の認知に影響すると考え、上記の質問を入れた。

1.3.と 1.4.の質問に関して祖父母以外の同居する家族(例えば父親や母親など)において方言話者がいるかどうかを知るための質問であったが、「家族」の定義が調査協力者によって様々であり、別居している祖父母もしくは親戚の中で方言話者がいる場合も含めて「いる」と回答する調査協

力者が多かった。そのため、ここでいう「家族」は、別居している祖父母や親戚も含めることとする。

2. 伝統方言の知識に関する質問

伝統方言の知識に関する質問は3つのセクションからなる。セクション1は、主に形態法に関する質問、セクション2は音韻に関する質問、そしてセクション3は語彙に関する質問である。全ての項目において「自分でも使う・聞いたことがある・聞いたことがない」のいずれかを選択し、「聞いたことがある」もしくは「聞いたことがない」を選択した場合、自分の言い方について記述欄に記入してもらう。セクション1では、例文を提示し、伝統方言が使われている部分の知識を問う。セクション2とセクション3では、語を提示した。

以下に、アンケートでの質問項目とそれぞれの項目を入れた狙いについて示す。

セクション1(主に形態法に関する質問)

① テスト前だから、今日は海に行がれなかつた (=テスト前だから、今日は海に行けなかつた)。

市原市方言では「行く」の語幹が有声化し「いぐ」となる。また形態面では「行く」の可能形の接尾辞が-eではなく-areを用いる点が方言的特徴となっている。

② あいつがなかなかキネー (=あいつがなかなか来ない)。

不規則変化動詞「来る」の否定形について問うている。「来る」の否定形は標準語と形式が異なっている。標準語における「来る」の否定形は、「語幹/ko-/ + 否定辞/-na/ + 非過去接尾辞/i/」の形であるが、方言形では語幹が/ki-/となり、否定辞と非過去接尾辞が母音融合を起こし[ne:]となる。

③ 今日は7時に帰ってクッダッペ? (=今日は7時に帰って来るんだろう。)

ノダ文の「ノ」が脱落して、ダ文になっている。また、推量を表す文末詞「ペ」も用いられている。終止形末尾の/ru/が促音で発音される音韻的特徴も含んでいる。

④ 明日は、宿題でもしべー (=明日は、宿題でもしよう)。

意思を表す文末詞「べ」について問うている。また、市原市方言では「する」に「べ」が接続する場合、語幹が終止形と同じ「す」ではなく連用形「し」になる点についても問うている。

⑤ あの人は、きっとやさしっぺ (=あの人は、きっと優しいだろう)。

推量を表す文末詞「ぺ」について問うている。

⑥ 昨日は寒くて、水がひやっけかったなあ (=昨日は寒くて、水が冷たかったなあ)。

形容詞語彙「ひゃっこい (=冷たい)」が母音融合で「ひやっけー」になる。その過去形「ひやっけかった」について問うている。「ひゃっこい(ひやっけー)」の過去形が「ひゃっこかった」ではなく、語幹が終止形と同様の母音融合を被った形式「ひやっけー」となるかどうかについても問うている。

⑦-1 おがのだよ (= 私のものだよ)。

「所有を表す『が』+準体助詞『の』」について問うている。また、市原市方言話者の一人称は男女問わず「おれ」、「おら」である場合が多く、所有を表す「が」と用いられる場合は「おらがの」もしくは「おがの」となる。

⑦-2 おがにはよめねーよ (= 私には読めないよ)。

経験者格助詞の「がに」について問うている。取り立てる意味の係助詞「は」が付くことによって対照焦点の意味を表している。

⑧-1 こしがいて一だよ、そわなかつただけどよ (=腰が痛いんだよ。言わなかつただけれど)。

否定文における、ノダ形の「の」の部分脱落し、ダ文になった形を問うている。また、「そう」は「言う」の方言形である。

⑧-2 だから、やめろってそいただよ (=だから、やめろって言ったんだよ)。

肯定文における、ダ文の形と、前質問と同じく方言語彙「そう」について問うている。

⑨ ほんのさっきまでいたけんが、いまいねーよ (=ほんのさっきまでいたんだけど、今はいないよ)。

肯定文におけるダ文の形と、接続助詞「けんが」について問うている。「けんが」は逆接を表す接続助詞「けれど」の方言形である。

⑩-1 あにすっべか (=何をしようか)。

「意思」を表す文末詞「べ」と、疑問詞「何 なに」における語頭の n 音の脱落について問うてい

る。

⑩-2 あんでそんなことすったかいよ (=なぜそんなことをするのか)。

肯定文におけるダ文の形と、疑問詞「何 なに」における語頭の n 音の脱落、そして終止形末尾の /ru/ が促音で発音される特徴について問うている。

⑪山田さんちは、田中さんちの裏なうちだよ。(=山田さんの家は、田中さんの家の裏の家だよ)。

場所を表す格助詞「な」を伴った連体修飾句について問うている。

セクション2(音韻に関する質問)

音韻に関して、以下の母音融合に関するもの4項目と、k 音脱落現象と k-h 現象に関するもの 4 項目を質問した。

・母音融合に関する項目

おめー(お前) /ae/ --> [e:] / ふてー(太い) oi --> [e:] / たけー(高い) ai --> [e:] /

ひきー(低い) ui --> [i:]

・ k 音脱落現象と k-h 現象に関する項目

あへる(開ける)k-h 現象 / あえる(開ける) k 音脱落現象

さはな(魚)k-h 現象 / さあな(魚)k 音脱落現象

セクション3(語彙に関する質問)

語彙に関しては、以下の 20 項目を質問した。

① 体言語彙

なんとば(=お墓)

古くからある語彙であると考えられる。現在では、この形式はあまり聞かれない。

あおなじみ(=青あざ)

千葉県のほか、茨城県など関東を中心に用いられている形式である。

にし(=お前)

「なんとば」と同様古くからある語彙で、現在はあまり用いられていない。80代話者は、「にし」という形式は粗っぽい印象があり、沿岸部の漁師が使うイメージであると話す。

かまちよちよ(=トカゲ, カナヘビ)

現在でも主に80代前後の年配の話者に用いられている形式である。

げーる(=カエル)

「かまちよちよ」と同様に、年配の話者に用いられている形式である。市原市方言の特徴である母音融合(/ae/ --> [e:])が働いている。

けっこ(=貝類)

藤原(1979)によると、市原市方言では小さいものや親しいものを表す際に接尾辞「こ」が用いられる。他の例は、「あなっこ(=穴)」、「ふなっこ(=鮒)」などがある。

ずるこみ(=横入り)

順番を守らずに、列の途中から入るさまを表す語彙である。

業間休み(=2時間目と3時間目の間の休み時間)

主に小学校で用いられている。

半分ずっこ(=半分ずつ)

食べ物などを半分にして分ける際に用いる語彙である。

② 用言語彙

用言語彙は以下の動詞語彙、形容詞語彙に分けられる。

②-1 動詞語彙

うっちゃる(=捨てる)

ゴミなど不要物を捨てる際に用いる語彙である。

ぼっこす(=壊す)

他動詞として用いられる。

むらす(=(尿などを)漏らす)

「ぼっこす」と同様に他動詞として用いられる。

こせーる(=作る)

「こしらえる」のくだけた言い方「こさえる」を母音融合(/ae/ --> [e:])が働いた形式で用いられる。

ちゃんがれ(=どけ)

「さ(下)がれ」の方言形であると考えられる。

②-2 形容詞語彙

はれわりー(=寂しい)

「張り合いが悪い」のくだけた言い方であると考えられる。「わるい」の部分に、母音融合(/ui/-->[i:])が働いている。「はりわりー」とも言われる。

いっけー(=大きい)

「大きい」の方言形「いかい」から、さらに母音融合(/ai/-->[e:])が働いた形であると考えられる。

こえー(=疲れた)

標準語における「こわい(おそろしい)」とは意味が異なり、「ひどく疲れた、骨が折れる」という意味で用いられる。

おいねー(=いけない, どうしようもない)

同じ意味の「おくない」の「ない」に母音融合(/ai/-->[e:])が働いた形である。

③その他の語彙

おっさ(=そうだよ)

相槌的に用いられる語彙である。

あんとんねー(=なんともないよ)

「何ともない」の「何」の語頭/n/が脱落し、「ない」に母音融合(/ai/-->[e:])が働いた形である。

5. 調査結果

5.1. 調査協力者の方言認知、言語環境について

表 31 では調査協力者の方言認知と言語環境に関する各項目の割合を表している。なお、以後の表全てにおける結果に関する数値は、小数点第2位以下を四捨五入とする。方言の存在に関して、「知っている」と回答した調査協力者は 51.8%、「知らない」と回答した調査協力者は 46.6%である。しかし、「知らない」と回答しているにも関わらず、大問2の「伝統方言の知識に関する質問」において、「自分でも使う」、もしくは「聞いたことがある」と回答している場合が見られ、方言であると気づかない、または今までそれが方言であると意識したことがない調査協力者が一定数いると考えられる。

また、表 32 では方言話者の続柄におけるそれぞれの割合を示している。祖父または祖母と同居している割合は 45.6%と半数を下回った。また、家族の中の方言話者について、「いる」と答えた割合は 37.5%である。方言話者の続柄について、「祖父」または「祖母」と記入した割合は合わせて 65.9%であり、一方で「父」または「母」と記入した割合は 12.0%であった。このことから、方言話者の多くは中学生の祖父母世代(大まかに 65 歳以上)であることがわかる。

表 31. 調査協力者の方言認知、言語環境

1.1. 千葉県市原市方言の存在を知っているか。	
知っている	51.8%
知らない	46.6%
1.2. 祖父母と同居しているか。	
同居している	45.6%
同居していない	53.1%
1.3. 家族の中に方言話者がいるか。	
いる	37.5%
いない	60.9%

表 32. 方言を使っている人の続柄の内訳

1.4. 方言を使っている人の続柄	
祖父	31.3%
祖母	34.6%
父	6.3%
母	5.8%
自分	5.8%
曾祖父	2.4%
曾祖母	6.7%
おじ	1.4%
おば	1.4%
兄	1.4%
姉	1.9%
弟	0%
妹	1.0%

5.2. 伝統方言の継承率

アンケート全項目の回答の平均は、「自分でも使う」が 7.9%、「聞いたことがある」が 21.0%、「聞いたことがない」が 71.1%である。以下の表 33、表 34、表 35 は、セクション1、セクション2、セクション3の順にそれぞれの項目の使用率と使用率を含めた知識保有率を表している。

表 33. セクション1における使用/知識保有率

伝統方言の形式	使用(%)	知識(%)
①テスト前だから、今日は海に行がれなかった	1.0	34.0
②あいつがなかなかキネー	4.0	33.2
③今日は7時に帰ってクッダッペ?	2.7	45.6
④明日は、宿題でもしペー	1.4	16.6
⑤あの人は、きっとやさしッペ	5.0	47.5
⑥昨日は寒くて、水がひやっけかったなあ	3.0	21.9
⑦-1 おがのだよ	1.0	20.1
⑦-2 おがにはよめねーよ	0.7	18.6
⑧-1 こしがいてーだよ、そわなかつただけどよ	1.0	21.8
⑧-2 だから、やめろってそいただよ	2.0	23.6
⑨ほんのさっきまでいただけんが、いまいねーよ	2.0	33.7
⑩-1 あにすッペか	2.3	28.2
⑩-2 あんでそんなことすっだかいよ	2.4	31.4
⑪山田さんちは、田中さんちの裏なうちだよ	1.4	14.3

表 34. セクション2における使用/知識保有率

伝統方言の形式	使用(%)	知識(%)
おめー	33.3	86.0
ふてー	34.1	73.8
たけー	53.7	86.4
ひきー	12.0	49.8
あへる	0.7	8.3
あえる	0.7	6.8
さはな	0.7	5.7
さあな	0.7	6.1

表 35. セクション3における使用/知識保有率

伝統方言の形式	使用(%)	知識(%)
なんとば(=墓)	1.4	9.6
あおなじみ(=青あざ)	58.3	80.6
にし(=お前)	1.7	10.0
かまちよちよ(=トカゲ、カナヘビ)	1.3	5.0
げーる(=カエル)	1.0	11.1
けっこ(=貝類)	0.7	3.4
ずるこみ(=横入り)	4.4	17.9
業間休み(=2時間目と3時間目の間の休み時間)	79.3	90.3
はれわりー(=寂しい)	1.3	6.7
いっけー(=大きい)	1.3	7.6
こえー(=疲れた)	2.0	13.9
うっちゃる(=捨てる)	6.3	29.6
ぼっこす(=壊す)	6.6	30.8
むらす(=漏らす)	4.3	13.6
こせーる(=作る)	3.3	15.6
おいねー(=いけない、どうしようもない)	7.0	29.7
おっさ(=そうだよ)	3.3	19.2
ちゃんがれ(=どけ)	1.0	4.4
あんどんねー(=何ともないよ)	8.7	31.8
半分ずっこ(=半分ずつ)	52.7	77.4

アンケート項目を「形態法」、「音韻」、「語彙」に該当するものに振り分け、それぞれの項目における平均の割合を出した。その結果を表 36 に示す。「形態法」の使用率が最も低く、「語彙」の使用率が最も高くなっている。しかし、特に「音韻」、「語彙」に関して、項目ごとに顕著な差がある。次項において、文の要素の観点からより詳しく割合を分析する。

表 36. 「形態法」、「音韻」、「語彙」に関する項目における回答の平均

	使用(%)	知識(%)
「形態法」に関する項目	2.1	27.9
「音韻」に関する項目	8.7	29.9
「語彙」に関する項目	10.3	25.3

5.2.1. 形態法に関する項目

形態法に関する項目は、セクション1の全項目である14項目が該当する。図 5 は、形態法における使用率を表している。また、図 6 は形態法における、知識保有率の分布を表している。

使用率は、図 5 が示すように、全項目が 5%未満と項目ごとに大きなばらつきは見られなかった。一方、知識保有率は項目ごとに差が見られた。

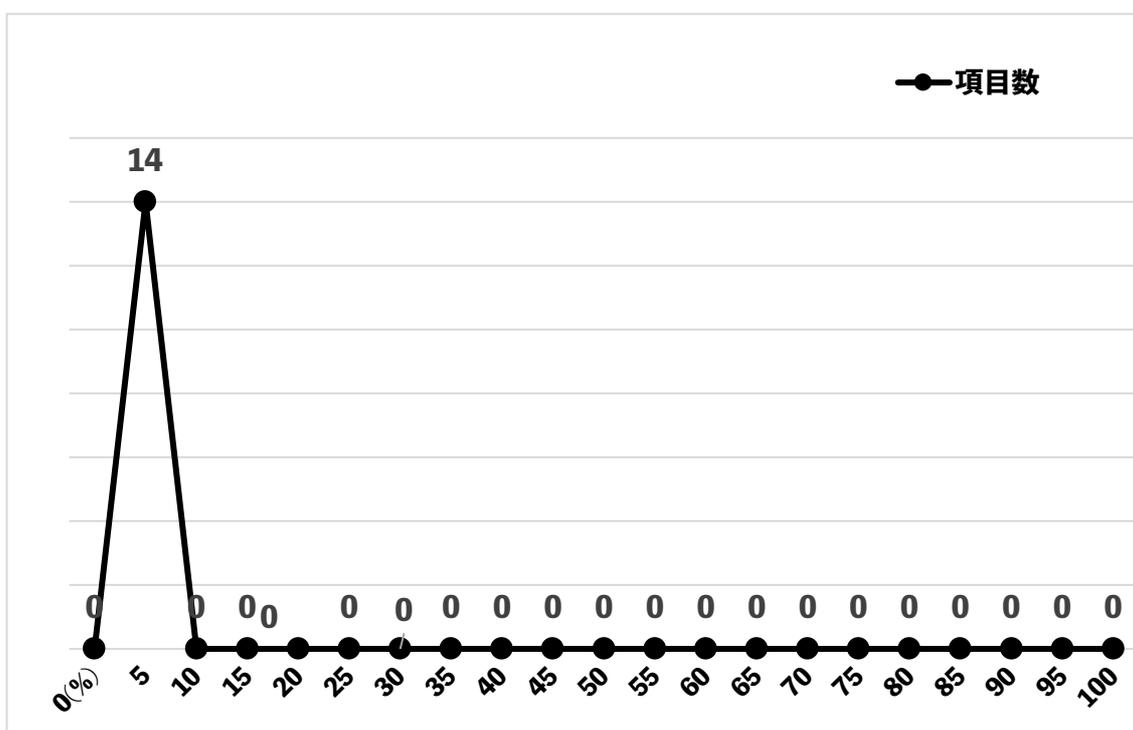


図 5. 形態法における使用率の分布

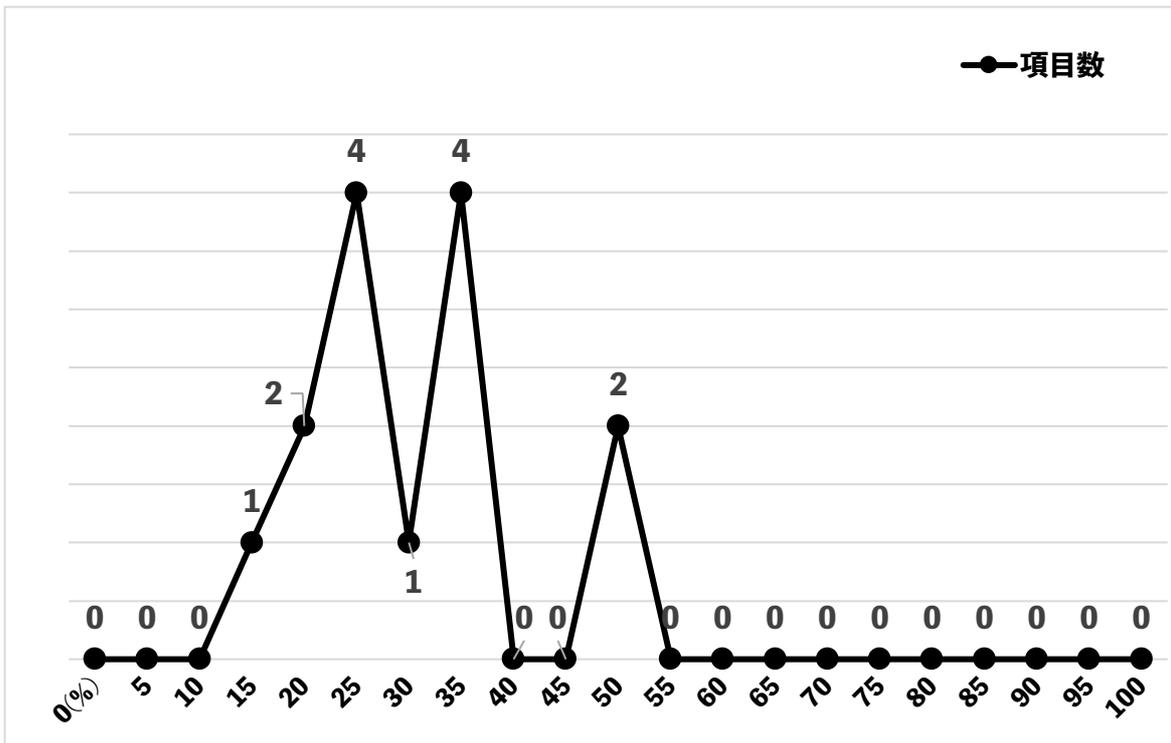


図 6.形態法における知識保有率の分布

文章における「」内の()は、「(使用率/知識保有率)」を表している。

知識保有率が最も高くなっている項目は、推量を表す文末詞「ペ」を用いている項目である、③「くっだっぺ(2.7%/45.6%)」、④「やさしっぺ(5.0%/47.5%)」である。推量を表す文末詞「ペ」は、動詞述語、形容詞述語、名詞述語のいずれにも接続が可能であり、最も耳にする機会が多い方言形式であると考えられる。知識保有率が最も高いことは最も耳にする機会が多いためと思われる。

また形態法に関する項目は、名詞形態法と述語形態法に分けることができる。名詞形態法は⑦-1「おがのだよ(1.0%/20.1%)」、⑦-2「おがにはよめねーよ(0.7%/18.6%)」、「⑩裏なうち(1.4%/14.3%)」の3項目、述語形態法は、①「行がれなかった(1.0%/34.0%)」、②「きねー(4.0%/33.2%)」、③「くっだっぺ(2.7%/45.6%)」、④「しべー(1.4%/16.6%)」、⑤「やさしっぺ(5.0%/47.5%)」、⑥「ひやっけかった(3.0%/21.9%)」、⑧-1「そわなかつただけど(1.0%/21.8%)」、⑧-2「そいただよ(2.0%/23.6%)」、⑨「いただけんが(2.0%/33.7%)」、⑩-1「あにすっべか(2.3%/28.2%)」、⑩-2「あんでそんなことすっだかいよ(2.4%/31.4%)」の11項目である。名詞形態法において、使用率の平均は1.1%であり、知識保有率の平均は18.7%である。一方、述語形態法において、使用率の平均は2.4%であり、知識保有率の平均は30.4%である。以上の割合から、伝統方言の継承において、名詞形態法は述語形態法より失われやすい要素であると考えられる。

本調査における形態法の継承率は、佐々木(2011)が茨城県常総市で行った伝統方言の継承に関する調査と類似した傾向が見られる。佐々木(2011)の調査においても名詞形態法は述語形態法よりも継承率が低かった。さらに、形態法に関する項目の中で最も継承率が高い項目は、推量を表す文末詞「ペ」を用いた「(雨が)降っペ」(雨が降るだろう、25.9%/85.2%)である。一方、最も継承率が低い項目は、有生与格の「ゲ」を用いた「銭はみんな、おめえげ やっておくベ」(銭はみんな、お前にやっておこう、1.6%/31.6%)である。また、市原市方言でも見られる経験者格助詞「ガニ」を用いた「おとつつあらがにや 分かるもんかよ、そんなこと」(お父さんたちにはわかるものかよ、そんなこと、0.9%/28.2%)や、連体修飾格助詞「ナ」を用いた「此の側な 小屋」(この側の小屋、4.4%/29.6%)も継承率は低い。本調査でも同様に、推量を表す「ペ」は最も継承率が高く、一方で経験者格助詞「ガニ」や連帯修飾格助詞「ナ」は継承率が低かった。

名詞形態法は、省略可能であるという点が述語形態法と異なっている。例えば、経験者格助詞「ガニ」を用いた⑦-2「おがにはよめねーよ」であれば、文脈によって「(おがには)よめねーよ」のように述語部のみでも成立する場合がある。また、連体修飾格助詞「ナ」を用いた⑩「山田さんちは、田中さんちの裏なうちだよ」に関しても、「山田さんちは、田中さんちの裏だよ」のように「ナ」を用いなくとも表現することができる。省略されやすい性質は、述語形態法に比べて、言語形成期にその表現に接する可能性が低いと推測できる。名詞形態法が述語形態法よりも失われやすいのは述語形態法に比べて接する機会が少ないためと考えられる。

表 37 は、以上で言及した名詞形態法に関する項目と述語形態法に関する項目の継承率の平均を表している。

表 37. 形態法における特徴別の割合

	使用(%)	知識(%)
名詞形態法	1.1	18.7
述語形態法	2.4	30.4

5.2.2. 音韻に関する項目

音韻に関する項目は、セクション2以外の質問項目からも該当するものを含めて分析した。音韻に該当する項目は、セクション1における5項目②「きねー (/ai/-->[e:])」、③「くつだっペ(語中/ru/の促音化)」、⑥「ひゃつけかつた (/oi/-->[e:])」、⑩-1「あにすつべか(語中/ru/の促音化)」、⑩-2「あんでそんなことすつだかいよ(語中/ru/の促音化)」、セクション2における全8項目、セクシ

ヨン3における7項目「げー(/ae/-->[e:])」、「はれわりー(/ui/-->[i:])」、「いっけー(/ai/-->[e:])」、「こえー(/ai/-->[e:])」、「こせー(/ae/-->[e:])」、「おいねー(/ai/-->[e:])」、「あんどんねー(/ai/-->[e:])」の全20項目である。

図7は、音韻の項目における使用率の分布を、図8は音韻の項目における、知識保有率の分布を表している。また、文章における「」内の()は、「(使用率/知識保有率)」を表している。

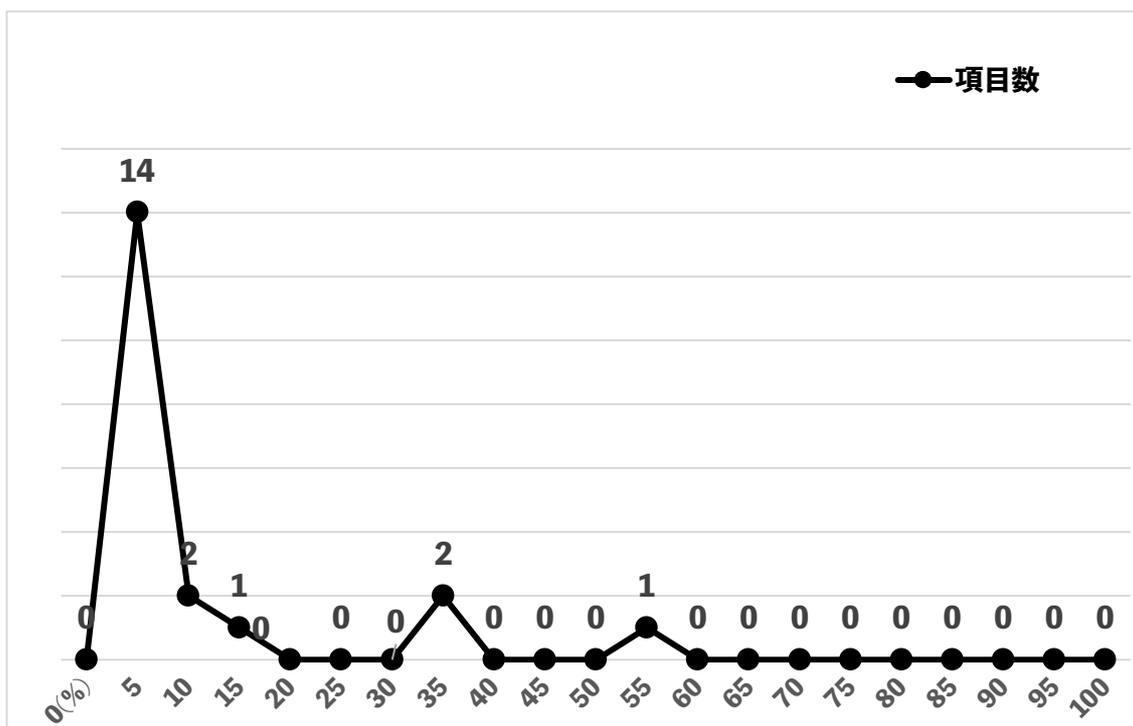


図7. 音韻における使用率の分布

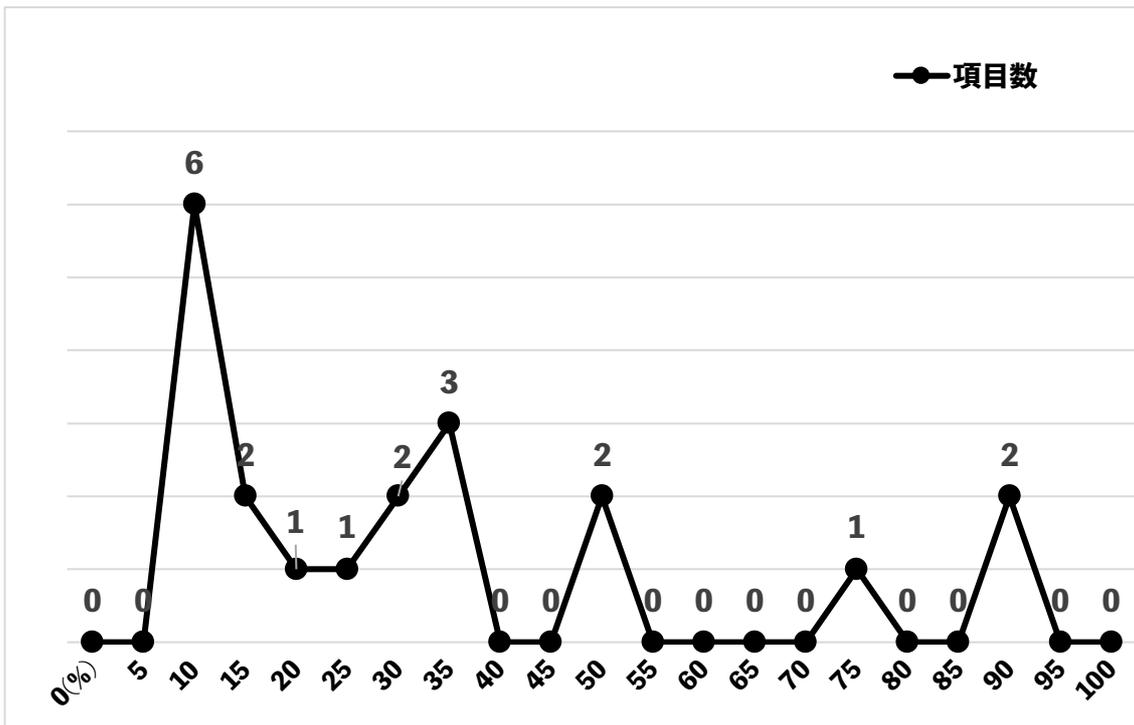


図 8. 音韻における知識保有率の分布

使用率は、母音融合のみを問うたセクション2の「おめー(33.3%/86.0%)」、「ふてー(34.1%/73.8%)」、「たけー(53.7%/86.4%)」が群を抜いて高くなっている。しかし、/ui/が母音融合され[i:]となる「ひきー(12.0%/49.8%)」に関しては使用率が12.0%と、他の母音融合と比べて使用率が低かった。

知識保有率に関しても同様に、セクション2の母音融合に関する項目が群を抜いて高くなっている。一方、子音に関する音韻の項目は知識保有率が低く、特にk-h現象とk音脱落現象に関する項目「あへる(0.7%/8.4%)」、「さはな(0.7%/5.7%)」、「あえる(0.7%/6.8%)」、「さあな(0.7%/6.1%)」は、知識保有率がいずれも5%以上10%未満である。

また、音韻に関する項目を、母音融合に関するものと子音の特徴に関するものに分け、それぞれ割合を出した。母音融合に関する項目は、セクション1の②「きねー(4.0%/33.2%)」、⑥「ひやっけかった(3.0%/21.9%)」、セクション2の「おめー(33.3%/86.0%)」、「ふてー(34.1%/73.8%)」、「たけー(53.7%/86.4%)」、「ひきー(12.0%/49.8%)」、セクション3の「げーる(1.0%/11.1%)」、「はれわりー(1.3%/6.7%)」、「いっけー(1.3%/7.6%)」、「こえー(2.0%/13.9%)」、「こせーる(3.3%/15.6%)」、「おいねー(7.0%/29.7%)」、「あんとんねー(8.7%/31.8%)」の13項目が該当する。また、子音の特徴に関する項目は、セクション1の③「くっだっぺ(2.7%/45.6%)」、⑩-1「あにすっべか(2.3%/28.2%)」、⑩-2「あんでそんなことすっだかいよ(2.4%/31.4%)」、セクション2の「あへる(0.7%/8.4%)」、「あえる(0.7%/6.8%)」、

「さはな(0.7%/5.7%)」、「さあな(0.7%/6.1%)」の7項目が該当する。母音融合に関する項目における、使用率の平均は 12.7%、知識保有率の平均は 36.0%である。一方、子音の特徴に関する項目における、使用率の平均は 1.4%、知識保有率の平均は 18.8%である。両者を比較すると、使用において大きな差が見られる。つまり、音韻に関しては母音融合に関する項目の方が残りやすく、子音の特徴に関する項目は失われやすいということが考えられる。表 38 は、以上で言及した割合を表している。

佐々木(2011)は、茨城県常総市で行った伝統方言の継承に関する調査の結果を受けて、独自性の高い文法項目が衰退していつていると述べている。市原市方言において、子音の特徴に関する項目は、母音融合に関する項目よりも独自性が高い。大西(2016)による『新日本言語地図』では、母音融合に関する項目、例えば「おきない」が「おきねー」のように、母音融合される現象は、関東一帯と東北地方の一部に見られる。一方で、子音の特徴に関する項目、例えば k-h 現象は漁業が行われていた市原市の沿岸部や、漁業が盛んな伊豆大島など、かなり限定された地域で見られる(谷萩 1971, 岡野 1981)。市原市方言の話者は現在高年層に偏っており、独自性の高い方言を聞く機会は、身近に話者がいない限り極めて少ないと考えられる。一方で、広範囲で用いられている形式は、話者と直接関わらなくとも、メディア等を通して聞く機会がある可能性がある。市原市方言においても、接する機会が相対的に少ない子音の特徴に関する項目の方が、母音融合に関する項目よりも早い段階で失われてしまう可能性がある。

表 38. 音韻面における特徴別の割合

	使用(%)	知識(%)
母音融合に関する項目	12.7	36.0
子音の特徴に関する項目	1.4	18.8

5.2.3. 語彙に関する項目

語彙に関する項目は、セクション3の全 20 項目と、セクション1における5項目⑥「ひやっけかった(形容詞『ひゃっこい(=冷たい)』)」、⑧-1「そわなかつただけど(動詞『そう(=言う)』)」、⑧-2「そいただよ(動詞『そう』)」、⑩-1「あにすつべか(疑問詞『あに(=何)』)」、⑩-2「あんでそんなことすっだかいよ(疑問詞『あんで(=なんで)』)」の全25項目が該当する。

図 9 は、語彙に関する項目における使用率の分布を、図 10 は語彙に関する項目における知識保有率の分布を表している。また、「」内の()は、前者が語彙の意味、後者が「(使用率/知識保有

率)」を表している。

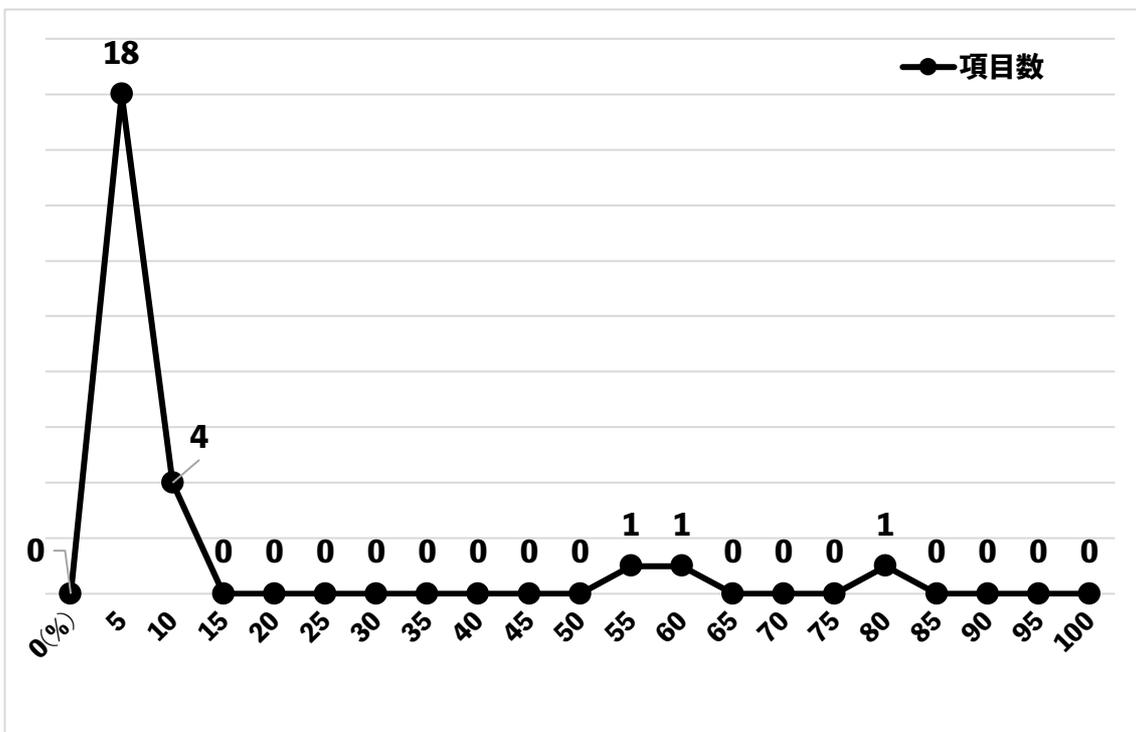


図9. 語彙に関する項目における使用率の分布

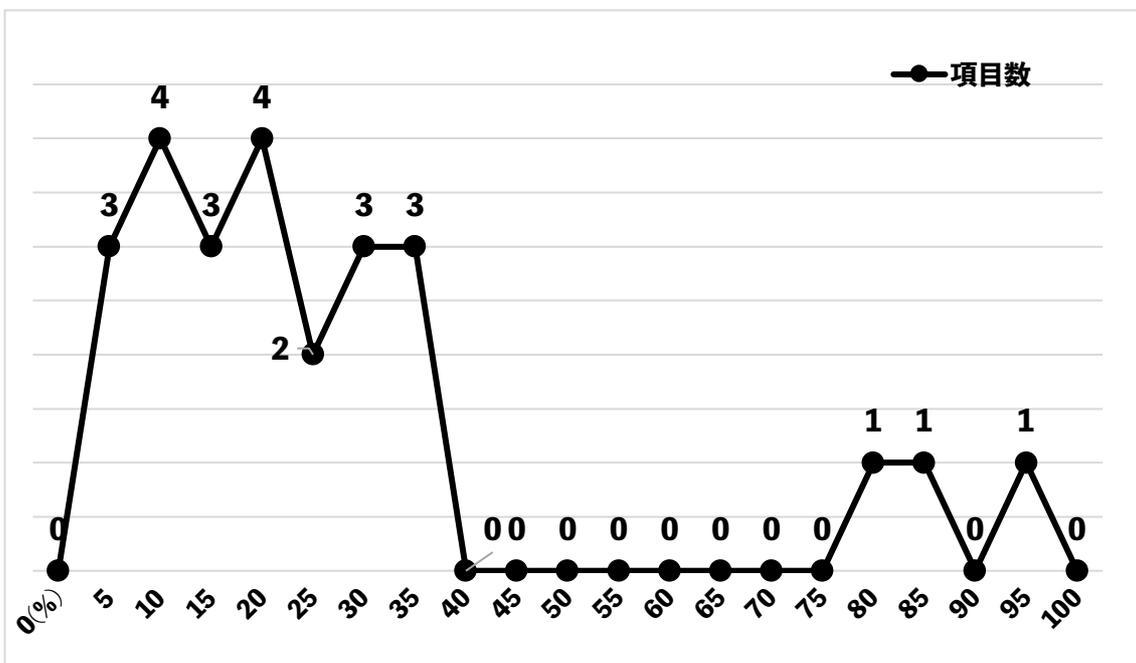


図10. 語彙に関する項目における知識保有率の分布

語彙に関する項目全体の使用率は 10.3%と、音韻に関する項目の使用率 8.7%よりも高くなっているが、項目によって大きな差がある。多くの語彙項目の使用率は 5%未満である。使用率が高い語彙は、市原市内の小中学校で使われている「業間休み(=2 時間目と 3 時間目の間の休み時間)(79.3%/90.3%)」である。次いで身体語彙の「あおなじみ(=青あざ)(58.3%/80.6%)」、食べ物などを半分に分ける際に使う「半分ずっこ(=半分ずつ)(52.7%/77.4%)」が高い使用率になっており、以上の3項目が全体の平均を押し上げていることがわかる。一方、使用率が 5%に満たない語彙は、疑問詞類「あにすっべか(『あに』=何)(2.3%/28.2%)」、「あんでそんなことすっだかいよ(『あんで』=何で)(2.4%/31.4%)」、名詞類「なんとぼ(=墓)(1.4%/9.6%)」、「にし(=お前)(1.7%/10.0%)」、動詞類「そわなかつただけ(『そう』=言う)(1.0%/21.8%)」、「そいただよ(『そう』=言う)(2.0%/23.6%)」、「ちゃんがれ(=どけ)(1.0%/4.4%)」、形容詞類「はれわりー(=寂しい)(1.3%/6.7%)」、「いっけー(=大きい)(1.3%/7.6%)」、「こえー(=疲れた)(2.0%/13.9%)」など、標準語とは形式が大きく異なっている語彙が多かった。

また、語彙に関する項目を、体言語彙と用言語彙に分けてそれぞれ割合を出した。体言語彙は、セクション3における「なんとぼ(=お墓)(1.4%/9.6%)」、「あおなじみ(=青あざ)(58.6%/80.6%)」、「にし(=お前)(1.7%/10.0%)」、「かまちよちよ(=トカゲ)(1.3%/5.0%)」、「げーる(=カエル)(1.0%/11.1%)」、「けっこ(=貝類)(0.7%/3.4%)」、「ずるこみ(=横入り)(4.4%/17.9%)」、「業間休み(=2 時間目と 3 時間目の間の休み時間)(79.3%/90.3%)」、「半分ずっこ(=半分ずつ)(52.7%/77.4%)」の9項目が該当する。用言語彙は、セクション1における⑥「ひゃっけかった(『ひゃっこい』(=冷たい)(3.0%/21.9%)」、⑧-1「そわなかつただけ(『そう』=言う)(1.0%/21.8%)」、⑧-2「そいただよ(『そう』=言う)(2.0%/23.6%)」、セクション3における「はれわりー(=寂しい)(1.3%/6.7%)」、「いっけー(=大きい)(1.3%/7.6%)」、「こえー(=疲れた)(2.0%/13.9%)」、「うっちゃる(=捨てる)(6.3%/29.6%)」、「ぼっこす(=壊す)(6.6%/30.8%)」、「むらす(=漏らす)(4.3%/13.6%)」、「こせーる(=作る)(3.3%/15.6%)」、「おいねー(=いけない、どうしようもない)(7.0%/29.7%)」の11項目が該当する。

体言語彙の項目における使用率の平均は 22.3%、知識保有率の平均は 33.9%である。しかし、この割合は突出して使用率の高い 3 項目、「あおなじみ」、「業間休み」、「半分ずっこ」が含まれている。そこで、その3項目を除外して、体言語彙の割合の平均を出すと、使用率が 1.7%、知識保有率が 9.4%となる。

一方、用言語彙の項目における使用率の平均は 3.2%、知識保有率の平均は 18.0%である。体言語彙における使用率の高い3項目を除外すると、体言語彙よりも用言語彙の方が使用率、知識共に高い。つまり、方言継承において、体言語彙の方が用言語彙よりも残りやすいと考えられる。そ

の背景には、「5.2.1. 形態法に関する項目」の中で考察した、名詞形態法の方が述語形態法よりも消滅しやすい要因と同様に省略されやすさがあるものと思われる。体言は文の中で省略されやすいため、用言語彙と比べてその表現に接する機会が少ないと考えられる。そのことが、使用率と知識保有率に反映されていると推測する。

さらに、用言語彙を動詞語彙と形容詞語彙に分けて割合を出した。動詞語彙における使用率の平均は 3.5%、知識保有率の平均は 19.5%である。一方、形容詞語彙における使用率の平均は 2.9%、知識保有率の平均は 15.9%であり、形容詞語彙よりも動詞語彙の方が残りやすいといえる。この違いは、動詞語彙に比べて形容詞語彙の方が標準語から大きく形式が異なっている場合が多いことが要因と考えられる。以上で言及した割合を表 39 に表す。

表 39. 語彙面における種類別の割合

	使用(%)	知識(%)
体言語彙	22.3	33.9
※体言語彙(使用率の高い3項目を除外)	1.7	9.4
用言語彙	3.2	18.0
動詞語彙	3.5	19.5
形容詞語彙	2.9	15.9

5.3. 「自分の言い方」について

全ての項目に「自分の言い方」を記入する欄を設けた。セクション1には、調査協力者の負担軽減のため「自分の言い方」の記入欄の横に標準語形を記載した。標準語形を用いる場合は丸をし、それ以外の言い方をする場合に「自分の言い方」に記入してもらう。セクション2、セクション3では、紙幅の都合上標準語形を記載することができなかつたため、「自分の言い方」の欄に自由記述してもらうこととした。

セクション1では、標準語形に丸をする例が大多数を占めた。セクション2、セクション3では、語例に括弧書きされた標準語形を記入する例が大多数を占めた。しかし、中には標準語形と伝統方言形が混ざった形式を記入する例も見られた。以下の項では、セクションごとに「自分の言い方」で記入された形式を示す。

5.3.1. セクション1における「自分の言い方」

①「行(い)がれなかった」における「自分の言い方」の中で、「いがなかった」が1例見られた。「いがなかった」は否定の過去形であり、狙いとする「いがれなかった」(可能動詞の否定の過去形)とは異なるため誤答であるが、「行く」のカ行音が濁音化する特徴を表している。また、「いかれなかった」が9例見られた。この例は「行く」の語幹末子音が有声ではないものの、可能形の接尾辞が-eではなく-are になる方言特徴を表している。その他、「いけれなかった」が1例あり、これは「行く」の可能形「いけない」と方言形が混ざった形式である。

②「きねー」における「自分の言い方」では、「こねー」が17例見られた。すなわち、語幹が「き」となるような形式は見られなかった。一方、否定接尾辞と非過去接尾辞の複合体[ne:]は若年層でも使われていることがわかる。

③「くっだっぺ」における「自分の言い方」では、「くんだっぺ」が1例見られた。「くんだっぺ」は /ku-ru=dar-pe/ ‘来る-非過去=コピュラ-推量’における非過去接尾辞/-ru/が撥音になった形式であると考えられる。「くんだっぺ」は「くっだっぺ」と同様に伝統方言話者によって使われているため、方言形の使用とみなしてよさそうである。また、「くるっぺ」が1例あった。この形式は、「くる」の標準語形に、推量を表す文末詞「ぺ」が接続した形式である。その他の記述では、標準語形「くるんだろう」以外に、「くるでしょ」、「くるんでしょ」、「くるっしょ」などが多数見られた。

④「しべー」における「自分の言い方」では、「すっぺ」、「するっぺよ」がそれぞれ1例ずつ見られた。市原市方言では、意思や勧誘を表す際に「べ」、推量を表す際に「ぺ」が用いられやすい。しかし、「自分の言い方」において、意思を表す文末詞として「べ」を用いる例は見られなかった。また、「する」に意思や勧誘を表す「べ」が接続する際、伝統方言では語幹が「し」になるが、「自分の言い方」で記入された形式は全て語幹が標準語と同じ「す」であった。つまり、伝統方言に見られるサ変動詞の一段化が生じていないことになる。その他「すっか」が4例、「するか」が3例あった。

⑤「やさしっぺ」における「自分の言い方」では、「やさしっしょ」、「やさしいっしょ」、「やさしいでしょ」などが見られた。

⑥「ひゃっけかった」における「自分の言い方」では、母音融合が起こっていない形「ひゃっこかった」が3例見られた。割合は低いものの、方言語彙「ひゃっこい」は現在でも若年層によって使われていることがわかった。

⑦-1「おがのだよ」、⑦-2「おがには」における「自分の言い方」では、方言形を記入した例は見られなかった。⑦「おがの」、⑦-1「おがには」は、「自分でも使う」と回答した割合がそれぞれ 1.00%、1.01%と低く、若年層の使用は皆無に近い状態であると考えられる。

⑧-1「そわなかつただけど」、⑧-2「そいただよ」に関しても、「自分の言い方」において方言語彙「そう」ないし「ダ文」の形式で記入する例は見られなかった。

⑨「いただけんが」における「自分の言い方」では「いたんだけんど」が1例見られた。この例は、逆接を表す接続詞「けんが」と標準語形「けれど」が混ざった形式であると考えられる。また、方言形ではノダ文の「ノ」が脱落するのに対して、この形式では「ノ」が復活している。その他、「ダ文」ないし接続助詞「けんが」を用いた例は見られなかった。

⑩-1「あにすっべか」、⑩-2「あんでそんなことすだかいよ」に関して、疑問詞「何」の語頭の/n/が脱落した形式で「あんでそんなことすだよ」と記入された例が1つ見られた。その他の例は全て/n/が保持された標準語形式である。

⑪「裏なうち」に関して、場所を表す「ナ」を用いた例は見られなかった。

5.3.2. セクション2における「自分の言い方」

セクション2では、「ふてー(太い)」、「たけー(高い)」、「ひきー(低い)」の「自分の言い方」について、それぞれ「ふっと」、「たっか」、「ひっく」と記入した例が見られた。これらは、語幹に促音が入り、接尾辞の「い」が脱落する形式である。「たけー(高い)」のみ、「たっか」以外に母音融合した形式である「たっけ」、「たっけー」を記入した例が1つずつあった。また、「ひきー(低い)」では、「ひけー」と記入した例が1つあった。

5.3.3. セクション3における「自分の言い方」

「自分の言い方」において、「なんとば(=墓)」、「にし(=お前)」、「かまちよちよ(=トカゲ)」、「げー(=カエル)」、「けっこ(=貝類)」、「はれわりー(=寂しい)」、「こえー(=疲れた)」、「ぼっこす(=壊す)」、「おっさ(=そうだよ)」、「ちゃんがれ(=どけ)」、「あんとんねー(=何ともないよ)」、「半分ずっこ(=半分ずつ)」に関しては、標準語形以外に記入された形式は見られなかった。

「あおなじみ(=青あざ)」は、「自分でも使う」と答えた割合が58.3%であり、「業間休み」に次ぐ使用率の高さである。「あおなじみ」に次いで用いられる形式は「あざ」、その次は「あおたん」であることがわかった。

「ずるこみ(=横入り)」について、アンケートでは標準語訳を「横入り(よこはいり)」としたが、「自分の言い方」では、平仮名で「よこいり」と記入した数は「よこはいり」と記入した数よりも多く、50例あった。しかし、それ以上に「わりこみ」の形式が69例と最も多かった。その他の形式では、「わるこみ」や「ぬかす」などの形式が数例見られた。

「業間休み(=2 時間目と 3 時間目の間の休み時間)」の他の形式では「やすみじかん」、「きゅうけい」、「ろんぐひるやすみ」、「ぎょうかん」(短縮形)が見られた。「業間休み」と同じ意味合いの、他地域の言い方とされる「20 分やすみ」、「中休み」などは見られなかったため、市原市では「業間休み」が一般的に定着していることがわかる。

「うちやる(捨てる)」の「自分の言い方」では、「なげる」、「ほっぼる」がそれぞれ1例ずつ見られた。

「むらす(=漏らす)」の「自分の言い方」では、「ぬらす」という言い方が7例見られた。「漏らす」の言い方は「むらす」や「ぬらす」など、言い方に若干の揺れがあると考えられる。

「こせーる(=作る)」の「自分の言い方」では、「こさえる」が2例見られた。「こしらえる」のくだけた言い方が「こさえる」であり、さらに母音融合した言い方が方言形の「こせーる」である。

5.4. 伝統方言の使用と家庭の言語環境の関係性

方言の継承と、祖父母との同居ないし家族に方言話者がいることは相関関係が見られた。「自分でも使う」と回答した調査協力者の中で、祖父母と同居ないし家族に方言話者がいると答えた割合は、ほとんどの項目が半数以上であり、100%の項目も見られる。また、その割合は継承率が低い項目ほど高い傾向がある。

表 40、表 41、表 42 は、それぞれセクション1、セクション2、セクション3において、「自分でも使う」と回答した調査協力者の中で、祖父母と同居している割合と、家族の中に方言話者がいる割合を表している。また、文章における「」内の()は、「(使用率/知識保有率)」を表している。

セクション1において、①「行がれなかった(1.0%/34.0%)」、⑦-1「おがの(1.0%/20.1%)」、⑦-2「おがには(0.7%/18.6%)」、⑧-1「そわなかつただけどよ(1.0%/21.8%)」、⑧-2「そいただよ(2.0%/33.7%)」など、全体において「自分でも使う」と答えた割合が低かった項目は、「自分でも使う」と回答した調査協力者の全員が「家族に方言話者がいる」と回答している。一方で、③「クッダッペ(2.7%/45.6%)」、⑤「やさしっぺ(5.0%/47.5%)」など全体において使用率と知識保有率が比較的高い傾向にある項目では、「自分でも使う」と回答した調査協力者の言語環境にばらつきがあることがわかった。

セクション2の項目においても同様に、全体において使用率が高い母音融合に関する項目、「おめー(33.3%/86.0%)」、「ふてー(34.1%/73.8%)」、「たけー(53.7%/86.4%)」、「ひきー(12.0%/49.8%)」は、調査協力者の言語環境にばらつきが見られるものの、使用率が低い子音の特徴に関する項目では、「自分でも使う」と回答した調査協力者のほとんどが方言話者と同居しているということがわかった。

さらにセクション3においても同様のことが言える。例えば、「なんとば(=お墓)(1.4%/9.6%)」や「けっこ(=貝類)(0.7%/3.4%)」、「はれわりー(=寂しい)(1.3%/6.7%)」など、使用率と知識保有率を足しても全体で10%ほどしか継承されていない古くからの言葉において、「使用する」と答えた協力者の全員が「家族に方言話者がいる」と回答している。

一方、全体において継承率の高い語彙群である「青なじみ(=青あざ)(58.3%/80.6%)」、「ずるこみ(4.4%/17.9%)」、「業間休み(79.3%/90.3%)」、「半分ずっこ(52.7%/77.4%)」は他の項目に比べて家庭内の言語環境との相関が見られない。そのことから、方言話者との同居は方言の継承に影響を与えることは明らかであるが、現在において実際に若年層に使用されている方言は、学校など家庭の外で継承される傾向があると考えられる。

**表 40. セクション1における「自分でも使う」かつ「祖父母と同居している」/
「家族に方言話者がいる」割合**

	祖父母と同居している(%)	家族に方言話者がいる(%)
①テスト前だから、今日は海に行がれなかった	100.0	100.0
②あいつがなかなかキネー	41.7	75.0
③今日は7時に帰ってクッダッペ?	50.0	87.5
④明日は、宿題でもしペー	75.0	100.0
⑤あの人は、きつとやさしッペ	46.7	66.7
⑥昨日は寒くて、水がひやっけかったなあ	55.6	88.9
⑦-1 おがのだよ	100.0	100.0
⑦-2 おがにはよめねーよ	66.7	100.0
⑧-1 こしがいてーだよ、そわなかつただけどよ	50.0	100.0
⑧-2 だから、やめろってそいただよ	83.3	100.0
⑨ほんのさっきまでいただけんが、いまいねーよ	50.0	100.0
⑩-1 あにすっべか	14.3	85.7
⑩-2 あんでそんなことすっだかいよ	0.0	71.4
⑪山田さんちは、田中さんちの裏なうちだよ	75.0	75.0

表 41. セクション2における「自分でも使う」かつ「祖父母と同居している」/

「家族に方言話者がいる」割合

	祖父母と同居している(%)	家族に方言話者がいる(%)
おめー	44.0	45.0
ふてー	38.8	44.7
たけー	45.3	46.6
ひきー	36.1	50.0
あへる	50.0	100.0
あえる	50.0	100.0
さはな	50.0	100.0
さあな	0.0	50.0

表 42. セクション3における「自分でも使う」かつ「祖父母と同居している」/

「家族に方言話者がいる」割合

	祖父母と同居している(%)	家族に方言話者がいる(%)
なんとば(=墓)	75.0	100.0
あおなじみ(=青あざ)	48.0	43.4
にし(=お前)	60.0	100.0
かまちよちよ(=トカゲ、カナヘビ)	75.0	75.0
げーる(=カエル)	66.7	100.0
けっこ(=貝類)	50.0	100.0
ずるこみ(=横入り)	46.2	53.8
業間休み(=2時間目と3時間目の間の休み時間)	48.3	39.9
はれわりー(=寂しい)	75.0	100.0
いっけー(=大きい)	75.0	100.0
こえー(=疲れた)	83.3	100.0
うっちゃる(=捨てる)	42.1	89.5%
ぼっこす(=壊す)	50.0	60.0

むらす(=漏らす)	53.8	46.2
こせーる(=作る)	70.0	100.0
おいねー(=いけない、どうしようもない)	57.1	85.7
おっさ(=そうだよ)	50.0	90.0
ちゃんがれ(=どけ)	33.3	100.0
あんとんねー(=何ともないよ)	42.3	84.6
半分ずっこ(=半分ずつ)	47.5	45.6

5.5. 学校ごとの方言認知、言語環境について

以下に、調査協力校ごとの調査結果を示す。市原市方言は、藤原(1979)など先行研究の中で、市原市内の地域において若干の違いがあると言われている。また、学区によって祖父母と同居している割合が高い地域など、言語環境にも違いがある。そのため、3校の学区の単位で、言語環境や方言の継承率にどのような違いがあるのかを明らかにする必要があると考えた。表 43 は、調査協力校ごとの、方言認知、言語環境に関する質問の回答割合を表している。「千葉県の方言を知っている」と回答した割合が最も高いのは市原中学校であるが、一方で祖父母との同居ないし家族の中の方言話者の有無に関しては最も低い割合である。しかし、「方言を知っているか」という質問は漠然としたものであり、方言に普段接していてもそれが方言であると認識していない場合も考えられる。したがって、方言認知の割合よりも、項目ごとの使用率ないし知識保有率の方が重要である。

表 43. 調査協力校ごとの方言認知、言語環境に関する質問の回答結果

	方言を知っている(%)	祖父母と同居している(%)	家族の中に方言話者がいる(%)
市原中学校	61.5	39.3	35.9
東海中学校	28.5	45.7	45.7
三和中学校	57.1	52.9	52.9

表 44、表 45、表 46 では、市原中学校、東海中学校、三和中学校の順に「形態法」、「音韻」、「語彙」の項目別の使用率と知識保有率の平均を表している。伝統方言の使用率、知識保有率ともに最も高いのは、三和中学校である。三和中学校は、3校の中で最も祖父母との同居している割合と、

家族に方言話者がいる割合が高い。そのような言語環境が方言の知識保有率の高さに結びついていると考えられる。

しかしながら、東海中学校は、祖父母と同居している割合ないし家族の中に方言話者がいる割合が2番目に高いにも関わらず、方言の存在を知っている割合は最も低い。伝統方言の使用率、知識保有率も3校の中で最も低かった。一方、市原中学校は東海中学校よりも祖父母と同居している割合と家族に方言話者がいる割合が低かったにも関わらず、使用率、知識保有率ともに高くなっている。また、市原中学校における、方言自体の存在を知っている割合は3校の中で最も高い。このことから、東海中学校と市原中学校の割合の違いは、方言への意識の差が一要因としてあると考えられる。

以上の結果から、伝統方言の継承において家族に方言話者がいることは、若年層に方言が引き継がれる大きな要因であると言えるが、必ずしもそのことが方言を使用することには結びついていないことがわかった。

表 44. 市原中学校における方言の使用/知識保有率

	使用(%)	知識(%)
「形態法」に関する項目	2.1	26.6
「音韻」に関する項目	8.3	29.3
「語彙」に関する項目	10.0	24.5

表 45. 東海中学校における方言の使用/知識保有率

	使用(%)	知識(%)
「形態法」に関する項目	0.9	23.9
「音韻」に関する項目	4.6	24.0
「語彙」に関する項目	6.7	19.5

表 46. 三和中学校における方言の使用/知識保有率

	使用(%)	知識(%)
「形態法」に関する項目	2.9	31.4
「音韻」に関する項目	11.7	33.9
「語彙」に関する項目	12.5	29.3

5.6. 地域ごとの方言認知、言語環境について

アンケートに記入された調査協力者の出身地(3歳から12歳まで最も長く住んでいた地域)は、合計で63地域であり、うち3校の学区に該当するのは46地域である。以下に、3つの中学校に通う調査協力者によって記入された出身地とその人数、そして「方言を知っている」、「祖父母と同居している」、「家族に方言話者がいる」と答えた人数を示す。なお、市原市外の地域は、該当者がほとんど1名であるため(1地域のみ2名)割愛し、ここでは市原市内の地域のみ結果を示すこととする。

表47、表48、表49はそれぞれ市原中学校の学区にあたる地域、東海中学校の学区にあたる地域、三和中学校の学区にあたる地域の人数と方言認知、言語環境を示している。異なる中学校において、同じ出身地が記入された例が1件あるが、その場合はその地域の学区にあたる中学校に含めた。その1件を除き、以下の表は括弧書きされた調査協力校ごとに記入された地域と人数である。なお、「未記入」は、市原市までは記入があるもののそれ以降の地域が書かれていない回答である。また、「※」は3校の学区には該当しない市原市の地域を表している。

表 47. 地域ごとの方言認知、言語環境（市原中学校）

地域名	人数(人)	方言を知っている (人)	祖父母と同居(人)	家族に方言話者がい る(人)
能満	36	25	17	17
郡本	29	15	11	7
藤井	14	9	4	3
門前	10	5	4	5
山田橋	5	3	2	1
市原	4	2	2	2
竹ノ内	3	2	2	0
山木	1	1	0	1
※八幡	1	1	1	0
※ちはら台	1	0	0	1
※下畑	1	1	0	0
地域未記入	3	2	1	1

表 48. 地域ごとの方言認知、言語環境（東海中学校）

地域名	人数(人)	方言を知っている (人)	祖父母と同居(人)	家族に方言話者がい る(人)
島野	16	2	6	1
廿五里	12	4	8	4
今富	11	6	5	6
海保	10	3	4	2
町田	3	1	2	1
宮原	2	1	0	0
引田	2	1	1	0
野毛	2	0	0	0
小折	1	1	0	0
西野	1	1	0	0
金川原	1	0	0	0
柳沢	1	0	0	1
十五沢	1	1	1	1
※五井	3	0	1	1
地域未記入	3	0	3	3

表 49. 地域ごとの方言認知、言語環境（三和中学校）

地域名	人数(人)	方言を知っている (人)	祖父母と同居(人)	家族に方言話者がい る(人)
海士有木	21	16	7	8
磯ヶ谷	17	8	9	7
松崎	7	3	4	2
土宇	6	3	5	3
武士	6	1	4	1
大坪	6	4	2	4
福増	5	3	1	2

新堀	4	3	2	2
川在	4	2	4	3
浅井小向	4	3	2	2
大桶	3	2	3	3
小野山	3	3	0	2
権現堂	3	1	2	1
安須	3	2	3	1
新巻	3	1	1	2
中谷原	2	2	2	1
三又	1	1	1	0
山倉	1	1	1	0
山田	1	0	1	0
高坂	1	1	1	1
上高根	1	0	0	0
二日市場	1	1	1	1
新生	1	0	0	0
西ヶ崎	1	1	0	1
※岩崎	1	1	0	0
※菊間	1	0	0	0
※君塚	1	0	1	1
※光風台	1	1	1	1
※国分寺	3	1	1	1
※姉崎	1	0	1	1
地域未記入	5	2	2	1

また、学区の人数が 6 人以上の地域において、アンケートの方言知識に関する項目の回答を集計し、地域別の方言使用率と知識保有率を比較した。表 50、表 51、表 52 はそれぞれ、市原中学校の学区にあたる地域、東海中学校の学区にあたる地域、三和中学校の学区にあたる地域の割合を示している。

市原中学校の学区にあたる地域において、祖父母と同居している割合または家族の中に方言話者がいる割合が高い地域は、方言の使用率ないし知識保有率も高い傾向にある。祖父母と同居している割合が最も高い地域は能満である。能満出身の調査協力者は、方言自体の存在を認知している割合が73.5%と学区の中で最も高いのに加え、使用率、知識保有率ともに高くなっている。能満は市街化調整区域であり、調査協力者の家庭の多くが代々その土地に住み続けていると考えられる。また、家族の中に方言話者がいる割合が、最も高い門前出身の調査協力者は、方言の知識保有率が最も高い。一方、祖父母と同居している割合と家族に方言話者がいる割合が、能満と門前よりも低い郡本と藤井出身の調査協力者は、方言自体の存在を認知している割合は高いものの、方言の知識保有率は低くなっている。市原中学校の学区は、郡本の一部や藤井など、一部市街化区域となっている。そのため、ほぼ全域が市街化調整区域である東海中学校と三和中学校の学区に比べて移住者が多いと考えられる。このような社会的背景があるために、市原中学校の学区の結果は他の2校と比較すると、祖父母または家族の中の方言話者からの影響がより顕著に顕れていると推測できる。

東海中学校と三和中学校の学区にあたる地域では、市原中学校ほど祖父母と同居している割合または家族の中に方言話者がいる割合の影響ははっきりしていない。すでに述べたように、東海中学校と三和中学校の学区はほぼ全域が市街化調整区域である。そのため、出身地域ごとに言語環境などのばらつきは見られない。しかし、東海中学校の学区において、祖父母との同居割合が66.7%と学区内で最も高い廿五里出身の調査協力者は、方言の知識保有率も最も高くなっている。

また、三和中学校の学区においても、祖父母との同居割合が最も高い土宇出身の調査協力者が最も高い割合で方言の知識を持っていることがわかる。このことから、家庭で方言に触れる機会の有無が若年層への継承を左右する傾向があることがわかる。

表 50. 市原中学校の学区における言語環境と方言認知

	人数(人)	祖父母と同居(%)	家族に方言話者がいる(%)	使用(%)	知識(%)
能満	36	47.2	47.2	10.3	17.5
郡本	29	37.9	24.1	10.2	13.2
藤井	14	28.6	21.4	9.2	14.4
門前	10	40.0	50.0	9.1	23.7

表 51. 東海中学校の学区における言語環境と方言認知

	人数(人)	祖父母と同居(%)	家族に方言話者がいる(%)	使用(%)	知識(%)
島野	16	37.5	6.3	5.5	19.3
廿五里	12	66.7	33.3	6.8	20.1
今富	11	45.5	54.5	5.8	12.8
海保	10	40.0	20.0	7.9	18.3

表 52. 三和中学校の学区における言語環境と方言認知

	人数(人)	祖父母と同居(%)	家族に方言話者がいる(%)	使用(%)	知識(%)
海士有木	21	33.3	38.1	12.9	21.2
磯ヶ谷	17	52.9	41.2	12.2	19.7
松崎	7	57.1	28.6	12.2	14.1
土宇	6	83.3	50.0	11.3	26.3
武士	6	66.7	16.7	8.1	10.6
大坪	6	33.3	66.7	9.5	22.3

5.7. まとめ

以上のアンケート結果をまとめると、以下のことが言える。

市原市に住む若年層、つまり本研究における調査協力者である中学生は、約半数が市原市方言の存在を認知しているが、実際に方言を使用している割合や、方言の知識を保有している割合は合わせて半数にも満たないことがわかった。また、若年層の周りで市原市方言を使用する人として回答されたのは、祖父または祖母である割合が最も多く、曾祖父、曾祖母も含めると、全体の75%を占める。そのため、「祖父母と同居している」もしくは「家族に方言話者がいる」と答えた調査協力者は、方言の使用率と知識保有率共に高い傾向が見られた。また、世代が若くなるにつれて方言話者として記入される割合は低くなっている。過去に市原市方言の使用率等に関する先行研究がないため正確な経年変化を指摘することはできないが、方言を使用する世代は現在の高年層以上の世代に偏り、今後市原市方言の使用率は低下していくと推測できる。

しかし、学校関連語彙である「業間休み(=2 時間目と 3 時間目の間の休み時間)」や友達同士で用いられやすい「半分ずっこ(=半分ずつ)」などは、祖父母もしくは方言話者と同居しているか

に関係なく使用率が高い。そのことから、学校など外の社会で用いられる表現が継承される傾向があることがわかる。

6. 終わりに

本研究では、千葉県市原市における伝統方言が若年層(中学生)にどのくらい、そしてどのようなかたちで継承されているかを調査した。調査の結果、市原市方言を実際に使用する若年層の割合は低く、また、現在において市原市方言の使用は高年層に偏っていることがわかった。したがって、今後、世代が変わるにつれて、伝統方言を聞く機会は減り、方言の衰退が進んでいくと予想される。

今後追求すべき課題は、継承に関する調査を引き続き実施し、経年変化を観察することである。また、より広い地域とより多くの人数を対象にすることができれば、より明確な地域差も発見することができる。さらに、本調査では行わなかった、方言に対するイメージや、方言を使用する場面などに関する項目を加えることで、方言が継承される、もしくは失われる要因についての理解が深まると考えられる。

謝辞

本研究を進めるに当たり、指導教員の佐々木冠教授と副指導教員の平田裕教授からは多大な助言を賜った。厚く感謝申し上げます。また、調査をするに当たり協力してくださった、市原市方言話者の方々、市原市ふるさと文化課の担当者の方々、そして市原市立市原中学校、市原市立東海中学校、市原市立三和中学校の教職員の方々と生徒の皆様に感謝の意を表す。

参考文献

- 安藤操(1980)『ふるさと千葉県の話』千秋社.
- 安藤操(1981)『続・千葉県の話』千秋社.
- 安藤操(2005)『房総のふるさと言葉』国書刊行会.
- 市原市(2019)「市原市について」『市原市公式ウェブサイト』市原市.
<https://www.city.ichihara.chiba.jp/joho/liveinfo/about/index2.html> (2020年1月8日閲覧)
- 上野善道(2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130:1-42.
- NHK 放送世論研究所(1979)『全国県民意識調査』日本放送出版協会.
- 大西拓一郎(2016)『新日本言語地図 分布図で見渡す方言の世界』朝倉書店.
- 岡野幸子(1981)「市原市五井周辺の言語調査-消えゆく k-h 現象をさぐる」『中央大学国文』24: 33-44.
- 落合三代次・谷島一馬(2007)『失われゆく浜言葉: 千葉縣市原市』市原を知る会.
- 金田一春彦(1942)「関東地方に於けるアクセントの分布」金田一春彦(1977)『日本語方言の研究』217-335, 東京堂出版.
- 金田一春彦(1969)「房総アクセント再考」『国語学』40:2-54.
- 金田一春彦、柴田武(1959)『NHK 全国方言資料』日本放送協会.
- 佐倉東雄(2007)『市原市八幡・五所地域の方言 田舎弁を散歩する』佐倉東雄.
- 佐々木冠(2011)「水海道方言 標準語に近いのに遠い方言」呉人恵『日本の危機言語 言語・方言の多様性と独自性』99-136, 北海道大学出版会.
- 佐々木冠(2018)「千葉県南房総市三芳方言」『全国方言文法辞典資料集』4:41-50, 方言文法研究会.
- 佐々木英樹(1998)「千葉県の方言について」日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一(編)『講座方言学 関東地方の方言』102-130, 国書刊行会.
- 総合企画部統計課(1955)「昭和 30 年 23.市町村別産業人口」『千葉県統計年鑑』千葉県.
<https://www.pref.chiba.lg.jp/toukei/toukeidata/nenkan/nenkans35/documents/1960023n.pdf> (2019年12月22日閲覧)
- 総合企画部統計課(1965)「昭和 40 年 43.市町村別, 産業大分類別 15 歳以上就業者数」『千葉県統計年鑑』千葉県.
https://www.pref.chiba.lg.jp/toukei/toukeidata/nenkan/nenkans43/documents/043n_27.pdf (2019年12月22日閲覧)

- 平塚雄亮 (2019)「言葉の変異と諸方言」『基礎日本語学』衣畑智秀編. 212-233
- 平山輝男(1974)『方言体系変化の通時論的研究』明治書院.
- 平山輝男(1997)『千葉県のことば』明治書院.
- 藤原伸介(1975)「千葉県南部地方における k 音脱落現象の推移」『学習院大学国語国文学会誌』19: 36-45.
- 藤原文夫(1972)「千葉県市原市南部方言のアクセントについて」『国学院大学 国語研究』34: 2-34.
- 藤原文夫(1979)『市原市の方言 市原市史別巻抜刷』藤原文夫.
- 谷萩かほる(1971)「千葉県市原市方言の音韻の研究」市原市教育委員会(1978)『市原地方史研究』9:1-51.

付録1：アンケート調査企画書（教育委員会宛て）

市原市若年層伝統方言継承アンケート

2019/05/10

立命館大学大学院 言語教育情報研究科
森田 帆南（モリタ ホナミ）

gr0372rp@ed.ritsumei.ac.jp

1. 調査目的

本調査の目的は、市原市内の伝統方言がどの程度若年層に継承されているかを調べることにあります。日本各地の伝統方言は長い年月をかけてはぐくまれてきましたが、20世紀中盤からマスメディアなどの発達による標準語の浸透で危機的な状態にあります。その一方で標準語と伝統方言の両方をリソースとして成立するネオ方言が各地で出現しており、その実態の把握が求められています。

市原市の伝統方言に関しては、市原市教育委員会が1979年に発行した『市原市史 別巻』の中の藤原文夫氏による『市原市の方言』や養老川流域の調査に基づく平山輝男氏の名著『方言体系変化の通時論的研究』（1974年、明治書院刊）があります。これに対して、管見の及ぶ限りでは若年層の方言の継承状況については研究がない状況です。そこで、本研究計画を立案した次第です。

2. 調査方法

若年層のこたばを調査する場合、高校生と中学生への調査が考えられますが、今回は調査対象を中学生とすることを考えています。これは、中学校の方が通学可能な学区が狭いため、より地域的な特徴を調べやすいと考えたためです。

市原市には22の市立中学校がありますが、その全てで調査を行うことを意図してはおりません。調査者の祖母が育った地域である二日市場や、祖母が20代から現在に至るまで暮らしている海保に近い地域の中学校5校で調査を行うことを考えております（ちなみに調査者である森田は東海中学校出身です）。これは、調査者の祖母の伝統方言とデータを対照するためです。具体的には以下の5校で調査をさせていただきたいと考えております：三和中学校、東海中学校、市原中学校、千種中学校、五井中学校。

調査は、別紙資料にあるアンケートを用いて行いたいと思います。このアンケートは文法項目や語彙項目について伝統方言の形式が継承されているかどうか、そして継承されていない場合どのような形式が用いられているかを調べるものです。

アンケートの実施方法に関しては、Google Driveを使った調査を行わせていただければ幸いと考えております。詳細は別紙資料をご参照ください。実施方法の詳細に関しては、面談の際に相談させていただきたいと思います。

上記のウェブ版アンケートの実施が難しい場合は、アンケート用紙を使った調査を行うことも可能です。

アンケート用紙を使った調査では集計の際にデータの誤記が少数生じる可能性がありますが、ウェブ版アンケートは回答者の記入したデータが直接反映されるため、そのような危険性が低いという利点があります。

3. 調査結果の還元

調査で得たデータを匿名化し分析した上で、広く地元の方にアクセスしていただけるかたちにしたいと思います。論文化した文章を広くアクセスできるようにします。また、市から求められれば個人情報の匿名化を行った上でデータを提供できるようにするつもりです。

4. 調査者が立命館大学大学院を修了した後の連絡先

調査者の連絡先は、2020年の4月以降変わる予定ですが、指導教員である佐々木冠が窓口となり、調査者の大学院修了後も問合せに応じられる体制を作ります。佐々木の連絡先は以下の通りです。

佐々木冠 (k-sasaki@fc.ritsumei.ac.jp)

アンケートに協力してくださる教員の皆様へ

市原市若年層伝統方言継承アンケート

1. アンケートの目的

この度は、市原市若年層伝統方言継承アンケートへのご理解とご協力に感謝いたします。

本調査の目的は、市原市内の伝統方言がどの程度若年層に継承されているかを調べることです。日本各地の伝統方言は長い年月をかけてはぐくまれてきましたが、20世紀中盤からマスメディアなどの発達による標準語の浸透で危機的な状態にあります。千葉県市原市も「房州弁」もしくは「浜言葉」と呼ばれるような伝統方言が話される地域であります。現在話者は主に高齢者に偏り、消滅の危機に瀕していると考えられます。

そこで、本研究では、市内の中学生を対象にアンケートを行い、どのくらい現在の若年層が市原市の伝統方言を認識しているのか、そしてどのような語が受け継がれやすいのかを把握・分析したいと考えております。

調査で得たデータは、今後匿名化し分析した上で広く地元の方にアクセスしていただけるかたちにしたと思います。また、それらは今後の伝統方言に関する貴重な資料となることを確信しております。

2. アンケートの構成

アンケートは以下のような構成になっております。

0. 回答者の情報記入欄（性別・年齢・3~12歳までの居住地域）

注意点 居住地域を記入する際、番地は書かないようにご指導願います。例：千葉県市原市姉崎
居住地域を記入してもらうのは、回答者が言語形成期を過ごしている地域を調べるためです。個人情報保護のため番地の記入は必要ないと判断しております。そこで、番地を書かないようお願いする次第です。

1. 言語環境に関する質問

方言の継承は、方言を使う世代（主に生え抜きの70歳以上の高齢者）との関わりが大きく関係してくると思っています。それゆえに祖父または祖母と同居しているかどうかの質問を入れていきます。

2~4. 方言の認知調査（文法・音韻・語彙）

実際に現在でも使われている方言形式を中心に、文法項目（形態法）・音韻項目・語彙項目の順番で挙げています。4. の「あおなじみ」や「業間休み」あたりの語彙以外は、ほとんどが若い世代は使っていないような表現ばかりであると思います。どのくらい「聞いたことがある」に○をするか、つまりどのくらい表現を知っているのかが重要であると考えています。

3. 回答方法

2.

- ・「自分でも使う」「聞いたことがある」「聞いたことがない」のいずれかに○をつける。
- ・「聞いたことがある」もしくは「聞いたことがない」を回答した場合は、自分の言い方を記入。
- ・標準語形を用いる場合は、標準語形に○をつける。標準語形以外の言い方をする場合、もしくは標準語に加えて他の言い方をする場合は、「その他」の自由記述欄にひらがなで標準語形以外の形式を回答。

例 ① テスト前だから、今日は海に行がれなかった (=テスト前だから、今日は海に行けなかった)。

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}
自分の言い方 いけなかった その他 (いけなかった) }

3.4. 音韻と語彙の項目では、紙幅の都合上、自分の言い方に標準語形を示していません。お手数ではありますが、標準語を使う場合であっても、「自分の言い方」の欄に記述するよう生徒さんたちにお伝えください。

注意点

「聞いたことがある」もしくは「聞いたことがない」を選択した場合は、下の「自分の言い方」にひらがなで記入するようご指導ください。これは問題にしている内容をどのように発音するかを知るためです。「自分の言い方」にはくれぐれも漢字を書かないよう、生徒さんたちにお伝えいただきたいと思えます。

4. アンケートの回収方法

生徒さんたちからアンケートを回収しましたら、後日アンケート返信用の封筒を送りますので、この封筒にアンケートを入れて送り返してください。着払いになっております。

5. アンケートに関する問い合わせ

このアンケートについてご質問等ございましたら、いつでも森田までお問い合わせください。

研究者：森田 帆南 (モリタ ホナミ)

立命館大学大学院 言語教育情報研究科 日本語教育学プログラム 修士課程2回生
e-mail: gr0372rp@ed.ritsumei.ac.jp

指導教員：佐々木 冠 (ササキ カン)

立命館大学大学院 言語教育情報研究科教授
e-mail: k-sasaki@fc.ritsumei.ac.jp

にし (=お前)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

げーる (=カエル)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

ずるこみ (=横入り)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

はれわりー (=寂しい)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

こえー (=疲れた)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

ぼっこす (=壊れる)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

こせえる (=作る)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

おっさ (=そうだよ)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

あんとんねー (=何ともないよ)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

かまちよちよ (=トカゲ, カナヘビ)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

けっこ (=貝類)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

業間休み (=2時間目と3時間目の間の休み時間)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

いっけー (=大きい)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

うっちゃる (=捨てる)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

むらす (= (尿などを) 漏らす)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

おいねえ (=いけない, どうしようもない)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

ちゃんがれ (=どけ)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

半分ずっこ (=半分ずつ)

{自分でも使う 聞いたことがある 聞いたことがない}

自分の言い方 _____

ご協力ありがとうございました。